

---

# SAVE

童竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SAVE

### 【NZノード】

N6289M

### 【作者名】

童竜

### 【あらすじ】

二つの人種が交じりあう二ホンで戦争が起きた

起こった理由は分からぬ・・・

しかし、十年の間

その戦争を止めようと影で準備をしてきた者達が動き出す

## 序章

二ホンには二つの人種が存在する

一つは機械文化を進めている人間

もう一つは昔からの伝統を守り、魔法を操る悪魔

相対する二つは交じりあい共存していた

しかし

何が起こったのか

十年前、人間と悪魔との間に亀裂が入った

力はほぼ互角だつたが

悪魔側にある種族が出現したため

人間はトウキヨウと呼ばれる土地に小さな町をつくり、町を防壁で  
囲つた

悪魔がどの場所で生活しているかは誰も知らない

ただ一つ言える事は

トウキヨウの外は、ほぼ無限の砂漠だということだけだ

## 第一章

トウキョウの防壁の上

そこに青白い髪をなびかせ歌う影があった

彼女は何かに気が付くように砂漠を睨み付けながら立ち上がった

「アイツらは馬鹿か・・・」

睨み付ける砂漠の地平線に土煙をあげながらトウキョウに向かい走る車があった

防壁にいる門番も彼女に遅れて気付くよつて部屋から出でてくる

「いやまあいいな・・・」

「私が行って来る。」

「リュリこの距離・・・まあ大丈夫か、気を付けるよ

リュリはノースリーブのロングパーカーを門番に渡すと「任せろ」と少し笑って階段を降りていかずに防壁から飛び降り砂の上に降り、下に装備されていたエンジンの付いたスノーボードの様な物に乗つて土煙の方へ向かつていった

「もう、あんな所まで行ったよ・・・。はえーなあ

「マモルさん、リュリはいる?」

門番の名前を呼んだのは  
高校生くらいの女の子だった

「おお、アラカ。さつき・・・多分カズマ達だろうな、車が追われ  
ているから助けにいったよ」

「待つて！リュリは確か武器持つてないよ！――一年前のあの時刀無  
くしたって言つてたし！」

アラカにそう言われ

マモルはリュリが走つていった方向を見て黙つた

「・・・・・まずいな・・・・」

## 第一章　?

カズマはアクセルを全開にして悪魔の放つた『蟲』から必死に逃げていた。

「ヤバいっすよ！カズマさん！！」

助手席に座るジュンが泣きそうになりながらカズマにすがりつく

「うつせーよ！…」」ちだつて必死なんだ！！」

あのよそ者だけには見られたくないな・・・

「人間・・・そんな鉄屑で私から逃げると思つてているか・・・？拳銃と言つ奴ならまだしも、充電が切れているようだな・・・」

蟲が喋りだし驚きながらもカズマは前をずっと見ていた。

「カズマさん（泣）」

「・・・クッソ！」

車を数十メートル進ませると人が立っていた  
片手には《サンドボーデ》を持っている

リュリだ

「アイツ・・・！？」

カズマが呟いた瞬間

微笑を浮かべたりコリは人間とは思えない脚力で跳ぶと、ボンネットの上に着陸して瞬間にサンンドボードをジュンに渡しながら呟いた

「助けに来てやつたぞ。」

そのまま、ボンネットを蹴つて蟲の方へ跳んでいく

「いつもながら、なんちゅう脚力なんだアイツは…！」

ジュンがサンンドボードを抱えながら叫んだ

カズマはリコリを睨み付けると思いついたように口をやけた

「アイツは一年前、自分の武器を無くしている……リコリ、お前には武器なんて何もない。足止め役にでもなるために……」

そり、思い出したカズマはにやけながらリコリの方を見た

その瞬間、カズマの口が魚の様に開く

リコリは音叉の様なクナイを取り出すと

蟲の脳天に突き立てていた

蟲は後ろに仰け反るとそのまま倒れ、体勢を整えようとすると虫の前に黒い返り血を浴びた白髪の女が立っている

「ここの私が……ここの私が人間なんぞに……！？」

その瞬間、風が吹き  
女の右目にかかっている長い前髪が揺らぐ

「お前……まさか……」

その言葉を放つたとき

顔の真ん中に熱いモノを感じ、目の前が真っ暗になつた

返り血を浴びたまま、呆気にとられ車を止めているカズマ達と合流  
すると  
ジュンからサンドボーデを奪い取る

「カズマ、お前……」

「何だよ、よそ者!」

「何故、得意の銃を使わなかつた。まさか、家に忘れて……」

カズマは顔を真つ赤にすると怒った口調で言つた

「そっ……そんなんじゃねーよ!お前だけで十分だと……」

リコリはその言葉を聞いて冷たい目をした

「まあ、良い。お前ら歩いてトウキョウまで来いよ。」

「何でだよ!」

「車が壊れてるからだ。」

リコリは言葉を吐き捨てるトランジボードで先にトウキョウまで戻つた

## 第一章　?

トウキョウの食堂でカズマとジュンは汗だくになつてうなだれてい  
た。

砂漠から十時間かけて歩いてきたのだ

「はい、水！アンタ達本当に馬鹿だよね、武器を忘れて砂漠に出る  
なんてや。死に行つたようなものだよ。」

目の前に置かれた水にすがりつくようにカズマ達はグラスを口に付  
け飲みだす。

アラカは呆れるようにため息をつく

「こつもつコリが防壁の上にいるとは限らないんだよ。彼女も色々  
トウキョウでやっているみたいだし。」

「あーもーーうつせーな。でもアイツに助けられたなんて認めない  
からな」

「そーツスよ！あんなよそ者になんか助けられた事なんてな、認め  
ないんすよ！」

カズマにつられてジュンがそう言つてアラカはジュンを睨み付ける

少し殺気が漂う中

リュリが返り血を流すためシャワーを浴びてきたのだらう。首にタ

オルをかけて店に入ってきた

「アラカ、やつぱりここにいたか。私を探していたってマモルが言つていたが・・・」

アラカはリコリを視界に捕らえると目を光らせてリコリの近くへ行つた

リユリは今の状況が分からぬせいかアラカを見ているだけだ

「カズマがそんなにリコリが嫌いなら、一年前の決着付けなさいよ・・・」

低い声でアラカが言つと「何の話しだ」とリコリが呟いたらアラカはリコリを見て怪しく微笑む

リコリはその笑みを見て  
やるしかない、じつなつたら止められないなど思い  
詳しい事は後から聞くことにした。

「何言つてゐんツスか！？あん時は確實に・・・！カズマさん？」

アラカの言葉を聞いたカズマはジコンの言葉を途中で止めて耐えきれなかつた笑いを吹き出すよつに爆笑する

「クハハハっ！…良いじゃないか、また氣絶としてやるよー・リコリ  
！！」

「カズマさん！？」

「明日の午後だ。一年前と同じ所で決着付けようぜー。」

最後の水を飲み切ると  
机に小銭を置いてカズマ達は店を出ていった

「アラカ。」

「何?」

「満足しているところ悪いが、何故こうなったのか教えて欲しいの  
と、私に用事つてなんだ」

リューリがカズマ達を見送ると冷静な口調でそう言った

それを思い出すよつによつにアラカは「あつー」と言い少し焦った

メインストリートを通りて、広間を右に曲がった所に『鍛冶屋、口ボット、武器まで』と鉄で出来た看板がぶら下げられた工場がある。ソラ爺と呼ばれるゲテランの頭と息子のキリヤで切り盛りをしている鍛冶屋だ

アラカがリュリを連れてその店に入ると直ぐに鉄を打つ音が響きわたる

「ソラ爺いー！一連れてきたよー！」

ソラ爺の耳に入つていないのでどうか

「ソラ爺い——！連れてきたよ——！」

アラカが息を切らしながら叫ぶとやつと鉄を打つ音がなり止み腰を曲げていいせいか

「ようやく来たか。」

「色々あつたから遅くなつちやつたの。ちゃんとこごり連れてきたからね。」

「ありがとな。それで新しい武器の使い心地はどうだ、リコリ。」

何も知らないアラカはリユリを見た

そつと、ナイフを取り出すとまだ手入れをしていないのか、蟲の返り血が付いたままだつた

「私が作ったんだ、それなりに良いさ。あとで鍛冶場の使用料を払うよ。」

ソラ爺はナイフを見ると感心したように頷き。キリヤを呼んだ

「自分が作った物は使いやすいとは思うが、そのタイプの武器はお前にとつて扱いづらい品物なんじやないのか?」

奥からキリヤが出てくるとその手には一メートルくらいだろうか、黒い布で巻かれた物が握られていた

「これをお前にやひひ。名は《月光》と言ひ

黒い布が取られると

光さえも反射していないのではないかと思ひほゞ真つ黒な二ホン刀が姿を現した

## 第一章　？

リューリはナイフをしまつとキリヤから刀を受け取った

刀は思つている以上に軽く、一瞬、金属であることを忘れさせるほど軽かつた

しつかり柄を握り、鞘からぬく

刃が姿を現すとアラカは感動するかの様に両手を口に当てる

「・・・刃さえも黒か・・・」の特徴、オリハルコンだなソラ爺

リューリが刀を構え眺めながら咳くと煙管を手に持ち、「ココと笑う口から煙をソラ爺は空に噴き出す

「よう分かつたな、リューリ。その通り、『月光』はオリハルコンで拵えたものだ。」

アラカは何の事か全く分からず、キリヤにそつと近づき小声で質問した

「オリハルコンって何？」

それに答えるようにキリヤも小声で囁つ

「オリハルコンっていうのは、ダイヤモンドよりも固くて、羽根のように軽い金属です。武器になると刃こぼれもしない、優れた武器になる品物です。」

「ふーん」とアラカは納得すると

『月光』を鞄に収めたりコリが『月光』をソラ爺の前に突き出したのを見た

ソラ爺は田を丸くする

「私には『龍牙』<sup>りゅうが</sup>がある。『月光』はいらないよ、他に渡したら良い」

リコリは去るよつて店の扉に向かう

「『龍牙』は一年前の悪魔狩りで無くしたんじゃなかつたのか?リコリ」

ソラ爺の言葉を聞いて足を止めたリコリは振り向いた

「武器は性能じゃない。」

その言葉を吐き捨て外へ出ていった

## 第一章　？

リコリがいなくなると  
鍛冶屋の空気が重くなつた

「ねえ、ソラ爺」

アラカがその空気をかき混ぜ始めるように口を開いた

「なんだ？」

「さつきの話にでてた『竜牙』って何の事？一年前に無くしたって  
言つてたけど」

ソラ爺は近くにあつた椅子に腰を掛け思ひ出を語り始めた

「『竜牙』っていうのはリコリがトウキョウに来たとき、田中の悪  
魔を斬り倒した刀の名だよ。一日見たときあれは良い刀だと思つた  
よ。『月光』とは違ひ白い刃の刀だった。」

「見たことあるような・・・無いような・・・」

するとキリヤが左腕をさすりながら会話をに入つてくる

「リコリに助けられた人間は皆見えますよ、『竜牙』を。彼女が  
来てくれなかつたら命がなかつたですか？」

アラカはキリヤの言葉を聞いて  
二年前、ちょうどこの日に起きた

静かな恐怖とリュリに会った時の事を思い出す

入る事を固く拒んだマモルを無視し防壁を飛び越え  
マントが顔を隠れるほどかぶつた人間がトウキョウに入ってきた

彼女は見分ける事が不可能に近い

人間に化ける魔法を使う悪魔達を次々と数を数えながら、始めはくすんだ白いマントも黒く染めていった

私の目の前に現れた悪魔が最後だったのだろう

私に向けられた銃弾の軌道を曲げ、悪魔の脳天に手に持っていた刀を投げ付けると力尽きた様に眠った

私がリュリと初めて会った時はそんなだった

次の日だった

リュリは最後の悪魔を殺した場所、私と出会った場所で何かを探していた

勇気を出して

『何か捜し物?』

と私が質問をすると

見た目とは少し違つ、透き通つたような声で

『・・・刀を無くした。大切な物を・・・』

と答えた無表情の顔が少し、悲しそうにも見えた

カーテンをザラッと一気に開けると温かい日の光が部屋の中へ差し込む

ほとんど何も置いていない白い壁に囲まれた部屋

リコリが一年近く住んでいる部屋

この部屋は何を思ったのかアラカの母が  
自ら経営している食堂の一階にあるマンションの一室を無料で貸して  
くれたモノだ

「フーグリ、朝ですよー。」

リコリは「眩しい」と眩きタオルケットを頭まで被つたが直ぐにアラカにはぎ取られた

「対決は午後からだる・・・寝させてくれ・・・」

そういうながらアラカが持っているタオルケットを奪い取る

「休日のお父さんみたいな」と言わないとよ。

アラカまたタオルケットをはぎ取り床に捨てた

「朝ご飯食べないと脳が働かないんだぞ。」

「平日のお母さんみたいな」と言つて・・・分かった。起きるよ。

リコリは左田をこすりながらベッドの端に座り

床に無造作に置いてあつた鞄に収めてあるナイフを身につけた。

アラカはリコリが昨日と同じ服だとつい口と気付き、部屋中を見渡した

ハンガーに黒のノースリーブのロングパーカーがかかっているだけで何もなかつた

「リコリ……」

「なんだ？」

リコリは靴を履きながら答える

「服つてそれだけ？」

「そうだが。それがビリした？」

アラカは慌ててリコリの肩を掴む

「リコリつて女の子だよね！？もう少し服、持つとかないと…あーもーショック！もつと早く気付けば良かつた」

「……」

リコリはアラカが慌ててそつそつと「向を今せら」つと書いたくなつたがやめておいた。

もう一回考える一私に、リコリが服を一着しか持っていない……  
じゃあ……

リコリは洗面所まで行くと歯磨きをし始めた  
部屋の中ではその音しか聞こえない

「リコリー！」

いきなりアラカはリコリに飛び付いた

もううん、リコリはその勢いで泡だつた歯みがき粉を吐き出す

「ゲホッ！ いきなり……何を……」

「決戦午後からだしゃ、 買い物行かない？ 午前中。」

鏡ごしに後ろを見ると  
目を輝かせるアラカの姿があつた

「買い物か……行くとしても何を買いに行くんだ？」

「リコリの服に決まつてんじゃない！ 最低でも三日分くらいはない  
とね。」

アラカは笑つてそう言つた

リコリは呆れたようにため息をつき、軽く笑つた

## 第一章　？

一階の食堂へ降りて行くといつもより多くの人がいた

「皆、リコリを心配して来たんだって」つとアラカは言つたが、それが客が多い理由なのかは全くわからない

とりあえず朝食を食べようといろんな人に声をかけられながら席に座る

その時、注文もしていないのに田の前にいつもより大盛りのモーニングが机の上に置かれた

リコリは思わずアラカの母親を見る

「しつかり食べなさいよ」

さすがに娘であるアラカもその量に驚きを隠せなかつたがリコリにとつては別に食べられない量ではなかつた

「私は応援してゐるよ貴女のこと。どうしても疑問が多すぎて信じられないのよカズマは。」

カズマは『竜殺し』の異名を持っているが、誰もカズマが倒したドラゴンの死体を見たこともなければ、その現場を見た事もない。

ただ、赤でも黒でもない

鮮やかな紫の血をかぶり帰つて來た。

これが唯一カズマを《竜殺し》と呼ぶ理由だった。

「うわそりやま。」

席を立ちリコリは店を出ようとすると慌ててアラカはその後をついていく

「リコリの服買つて来るね。たぶん、そのまま広場に行くと思つ。」

「行つてらっしゃい！カズマにギヤフンと言わせて帰つて来なさい。夕食、豪華にしどりあげるから。」

アラカは笑つて手を振り店を出た

アラカは笑つて手を振り店を出た

リコリの手を引っ張り適当な服屋にアラカは入つて行く

「やっぱ、リコリはボーアッシュな感じが良いよね。リコリがスカートなんてありえないしね。」

いくつかの店を歩き回つたがアラカが納得するものはなかった

もちろん、リコリも手にとつて見てみるもの

手触りが納得できるモノはなかつたし、デザインも良いものがなかつた。

それよりもリコリが選ぶ基準は戦闘時に動きやすく、丈夫なものだ

つた。

五店舗くらい回ったときアラカは一つの店に目を付けた

「やっぱり此処しかないよね！」

リコリはふと看板を見る

アラカが好んで身につけているブランドの店だった

この店は基本的にスポーツ用品を扱っている店らしく、服も通気性が高い物が多いし丈夫な物も多い

「此処でだつたら何かしらあるんじゃない？」

「そうだな。此処で決められたら良いんだが。後、一時間くらいで行かないとカズマがつるさいかもな」

リコリが服を見ながらぼそりと呟く  
それを聞くとアラカは慌て始めた

三十分くらいたつとアラカがリコリの近くに走って来る

「ねえーこんなのどう?..」

リコリに手に持っていた服をあててみる

アラカが選んだ服は地味でも派手でもない、リコリの白髪にも合つ  
ちょうど良いTシャツと黒の七分丈のパンツだった

「どうかな？」

「私は良い」と思つ。」

一つ候補が決まると次々と四田分くらいは決つていった

本当のところ、リコリもこのブランドは好きだった  
そういうよりも気になっていたと言つた方が正しい

「もうそろそろ時間じゃない?」

「そうだな。買つて来る。」

そう言つて籠を持つとリコリはレジの方へ歩いて行った

アラカはそれを見送ると「さてと・・・」と言つて何かを探し始めた

リコリは会計を済ませ元の場所に戻つて来るがアラカの姿がない

肩を叩かれ後ろを向くと  
頬に人差し指が食い込んできた

「アラカ?」

「ふふつ。はいコレ!」

アラカは長方形の箱をリコリに突き付ける

リコリは何も分からぬまま箱を受け取る

「リコリがトウキョウに来て一年になるじゃん。絶対、誕生日は一回は来てると思ったからプレゼント！」

## 第一章　？

リコリが箱をそっと開けると黒い革製の手袋が入っていた

「これは・・・？」

「理由は聞かないけど、リコリずっと手に包帯巻いてるからさ、見られたくないのかなって・・・でも、ほらー色違いなんだよー。」

アラカは右手を出すと白いアームカバーをしていた

「なんて言つたか・・・絆の証みたいな。あつー勝手にこんなこと言うなんてダメだよね。」

リコリの方をそっと見ると彼女は笑いを堪えるように肩を震わせていた

ちょっと一息つくと

ボソッと微笑しながらリコリは呟いた

「・・・絆か。そうだな、大切に使わしてもうつよ。」

包帯を巻いている手の平を見つめたりコリの顔は嬉しそうにも見え、悲しそうにも見えた

不意に時計を見ると時間ギリギリのが分かり  
アラカが慌てる

「ヤバいよー時間ーー！」

「ホントだな。」

リューリが冷静に言葉を返すとアラカがリューリの腕をつかみ走り始めた

広場には町を守る為にシールドがはられていた

一年前はシールドをはらなかつた為  
トウキョウが一部壊れた

当時、喧嘩を売つたのはカズマだったからトウキョウの幹部達にか  
なり叱られたそのせいもあってか  
カズマがそうさせたのだろう

リューリ達がついた頃にはまだカズマの姿が無かつた「自分で時間決  
めといて遅刻してるとアラカがイライラしながら待つていた

リューリの場合は一人の喧嘩に巻き込まれたような形だったからかア  
ラカの言葉に動じる事は無かつた

「珍しいな、リューリが少し遅れて来るなんて」

背後から聞こえた声の持ち主はソラ爺だった  
その後ろにはキリヤもいる

「ソラ爺、来てたんだ。」ううのあんまり好きじゃないって言ってたから来ないかと思つてた。」

「あははは。最初は来る気なんて全く無かつたんだが、今朝いきなりカズマの泣きっ面が見たくなつてな。」

その言葉をリココの耳を見て言つたが彼女は少し眉をひそめた

## 第一章　？

結局カズマはリュリ達が着いた一時間後に広場に来た

たぶん、余裕をかまして寝坊したのだろう

（髪が若干はねていたから）

「リュリー！」

リュリがシールドに入つて行こうとしたときアラカがリュリを抱き締めた

「いけないよアラカ……どうした？」

涙目になりながらアラカはリュリの顔を見つめている

「勢いだつたけど、私のせいでこんなことになつて『ゴメンね。』

「お前が謝る必要はないよ、いつかは決着付けなければならなかつたのかもしれない。少しそれが早くなつただけだ」

そつとつて着ていた上着をアラカに渡す

「今は『イツがある今までみたいに棒切れで戦おうとはしないぞ。』  
ベルトにぶら下がるナイフに手を添えてリュリは少し笑いシールド  
の中へ入つていった

「始めようか。できれば早めに終わらせたい。」

「あん時は無口だったのに、よくしゃべるようになつたじゃないか。  
まあ、言われなくてもすぐに終わらせてやるよ！――」

カズマはレーザー銃を取り出し撃つた

普通の銃より弾丸が速いがリュリの自慢の脚力で弾丸を避けられた

それを見てカズマは舌打ちをしてまた次々と弾丸を放つ

それも全くリュリにはあたらずシールドに吸収されるだけだった

「少しごらり当たつたらどうなんだ！――」

「お前は人を殺す氣か？ 戦法も変えないで馬鹿みたいに乱射してい  
るくせに。」

息を乱すカズマを見てリュリはため息を吐いた

「分かった、終わらせてやる。見失うなよ。」

その場から消えカズマの後ろに立つ

「見失うなと言つたる？――」

「クソツ――」

カズマは気配を感じたからか、彼女の言葉が耳に入ったからなのか

素早く銃口を後ろに向ける

シールドの中だけではなく  
その外まで銃声が轟いた

「リコリッ！？」

思わずアラカはシールドに手を突く

カズマは銃口を向けたまま

汗を流し、息を荒くさせながら立っていた

「言つただろう、見失うなど。私の勝ちだ」

リコリはナイフを逆手で持つ

刃をカズマの首、ギリギリの所で止めていた

カズマはシールドが無くなると同時にその場で崩れ落ちた

それを見て構えていたナイフをそつと鞘に戻し

リコリはアラカに強く抱き締められた

「おめでとう、リコリ。」

「私は大したことはしてないよ。」

## 第一章　？

カズマがリコリにストレート負けした日から数日後

あの日が無かつたかのよつにトウキョウの町はいつも通りだつた

リコリはまた防壁の上に登り歌を歌つてゐる

そつと近くにいつて隣に座り歌を聞ひにくるとリコリは歌つのを  
止めた

「前から気になつてたんだけど、何の歌なの？」

リコリは少し口ヲチを向いてまた砂漠の方を見る

「私の祖国の歌、この世界を歌つたものだ。これを知つてゐるのは  
私の家族しかいながな。」

「私は好きだよ、その歌。」

「そうか・・・」

その時リコリの顔が少し悲しげに見えた

いつも思つてた事  
リコリはたまにこの顔になる  
何でだらう？

でもこの時、なんでもすぐに質問しかけて私でもリコリに聞く事はしなかつた

「そういえばあの時からソリ爺は全然『月光』の事言わなくなつたね。」

「きっと、刀以外でも私が戦える事が分かつたからじゃないか?」

リコリがナイフを取出し言った

「そういうえば、そのナイフは何でそんな形になつているの?」  
「言つのかな。」

リコリは防壁に軽く二字になつていてるナイフをぶつけた

その時

ナイフから優しい金属音が響いた

「！」の音が出したかったから

「・・・つえ?」

耳を疑つた

まさかそんな理由で通常じゃあり得ない形にしたって言つなんて

「このナイフは突きにはむかないが切るとなると普通のナイフ異常なんだ」

「まあ、リコリらしくって言えばリコリらしくてかな。」

「どういった意味だ？」

私の言葉にリコリが反応する

「だって、トウキョウでは電気を使った武器が普通じゃんカズマのレーザー銃みたいに。でもこの『』時代にリコリは反発するみたいに刃物で戦ってるじゃない。」

軽く笑いながら私がそういうとリコリは少し考えて微笑した

「確かに、そうかもしれないな・・・。ただの機械音痴つてだけなんだが。」

「なるほど、そういう意味もあるね。」

一年前くらいに家にあつた電子レンジを壊した事があった何をしたのかは分からぬけど私が来たときにはレンジが黒い煙を上げていて

ただリコリは驚いたように顔を黒くしていたのを覚えている

この時に「機械音痴の人間がいたんだ」と思った

「いきなり着いてこいつて何の用だ? カズマ」

「良いから来い。来ればわかる」

リュリは人気のない路地に連れて来られた

周りは相当暗い

よく迷いなく進んで行けるなと感心するほどだ

カズマはまだまだ進んで行く

この先に何があると言つんだ

カズマが立ち止まると目線の先に一つの今にも消えそうな光が見えた

かすかにその光のおかげで鉄製の扉が見える

「着いたぞ。入れ」

カズマはその扉を開けてリュリが中に入った後しつかり鍵をかけた

中は外見と比になるよじにとても明るい

そこでかなり多くの人達が機械を使って何かをしてしたり、作ったりしている

見回して見ると見知っている人も何人かいるようだ

「リコリは一體……」

リコリは田を丸くして驚く

その姿を見てカズマは笑い、話し始める

「トウキョウを守る為にだけ創られた場所『ロート』。その名の通り、ロートの警備システムはトウキョウの地下中に張り巡らされている。」

「なるほど、だいたい分かった。じゃあ何故だ?何故私をここに連れてきた。あれ程よそ者と言っていたお前が……」

「一年のうちに貴女は沢山この街を救つてきたからよリコリ。」

そう言つたのは肌が綺麗な茶色に焼けた眼鏡をかけている、いかにも真面目そうな女性だった

「マー・マルー?」

「驚かないでよね。一樣私が貴女をここに入れようとした時に言ったんだから」

「やついう事じや無い。」

リコリはマー・マルの服を掴む

「貴女の言いたい事は分かるよ。それは今言つてじやない。」

リュリは刃を食い縛り、マーマルを睨み付けた

「とりあえず、こっちへ来て。上の人たちに紹介しなきゃ、貴女に  
来た意味がないわ。」

## 第一章　？

リュリがマー・マルの『上』に会っている時

トウキヨウから遠く離れた砂漠に

巨大な虫達とそれに乗る人影があつた

「誰だろね。僕が作つた鉄の蟲を倒したの。」

「ワタシハ見タ」

手のひらサイズの蟲が影の肩にとまる

「誰？人間？まあ、人間以外にいないと思つけれど。」

「白イ髪ノ女ダツタ。ワタシモ殺サレル所・・・・ギヤツ・・・」

影は何も言わず蟲を握り潰した

蟲達は少し主人の殺氣を読み取った

「わー悔しいな。誰かは知らないけれど、僕が直々に白い女を殺してあげるよ。」

影が乗つている蟲はさつきより速く飛んだ

やつと部屋に戻れると上着と装備をベッドの上に投げ捨ててソファーにびくと座る

「契約書だかなんだか知らないが、機械いじらせやがって・・・」

リュリはロートに半強制的だつたが入ることになり誓約書を書かされた

トウキョウにはもつ紙や鉛筆という物は存在していないと言つてもいい

それ位、機械が発展していく何をするにも機械だ

だから、機械音痴であるリュリは普通の人間なら数分で出来る事を何時間もかけて遣り遂げた

少しの間

身体の力を抜いてソファーの上で横になる

「はあ・・・」

リュリはズボンのポケットから別れ際にマーマルに渡された手のひらサイズの黒い板の様な物を取り出し彼女の言葉を思い出していた

『とりあえず、これ持つといて。何かあつたらこれを通じて連絡するわ。』

リュリはソファーに横になりながら黒い板を見る

『携帯』と言つ物らじこが・・・・・

「渡されたのは良いが、どうやって使つんだ？」

携帯をひらり返してみたりライトに照らしてみたりするが全く使い方が分からなかつた

「はあ・・・・。」

リコリはまたため息をつき相当疲れていたのだしつそのまま眠りに就いた

私の目の前にソーマがいる

今までの事は夢だったのだらつか？

「お願いがあるんだ、リコリ」

「どうした？ いきなり。お前らしくもない」

ソーマの顔は笑つてゐるが心は泣いていた

あつ・・・・そつか

私は過去を見ているのか

「願いと言つても一つだけ。もしも、僕が死んだら私の家族を・・・」

「それ以上言うな。・・・私達はキズナで結ばれている。そのくらいの事は分かつているよ。」

「ありがとう、リコリ」

そう言つた彼の顔と心は嬉しそうだった

その顔は今でも鮮明に覚えている

次の日

雨の降りしきる中

私は必死にソーマを守つた昨日の約束を果たさない為に

でも、田を離した隙だつた

私の目の前で彼は倒れた

泥水に身体を打ち付け

届きそうで届かない腕を伸ばし

片手に彼の『竜牙』を握り締めて

その名を声が消えるまで叫んだ

いつも繋がっていた心が途切れても、ずっと涙を初めて流しながら

叫んだ

## 第一章　？

「ソーマ……！」

リコリは飛び起きた

また・・・見てしまった・・・？

頬が濡れていた

寝ながら泣いていたのだ

素手で涙を拭う

不意に手の甲を見てソーマの願いを思い出す

「これさえ無ければ、ソーマ、お前を救えたのにな・・・」

私はまたキズナを結んでしまったよ

リコリはソファーの端に縮まつた

はっと顔を上げ

ソファーを飛び出してベッドの上の上着と装備を取り扉に向かった

ノックが聞こえ扉が開かれると  
アラカが驚いて後退りをした

「リコリ、どこへ行くの・・・

そう言わるとリコリは携帯をアラカに投げつけると落とさないよ

うに必死にアラカはキャッチした

「それでマーマルつていつやつに連絡をしてくれ」

「連絡つてー何をー?」

「蟲の魔法を使つ悪魔が来ていると言え!私は先に向かうーー。」

リューリは廊下の窓を開けて屋根を伝いながら防壁に向かつて行つた

アラカは受け取つた携帯で電話をかけた

「もしもしし、マーマルさんですか?」

『ええ、そうよ。その声アラカちゃんね、貴女の話は聞いているわ。

』

「リューリからの伝言です。蟲の魔法を使つ悪魔が来ているそうです。  
それと先に行つているつて

『分かつたわ。アラカちゃん、貴女は早く地下に避難しなさい。』

その言葉を最後に電話は切れた

なんで、リューリは顔が広い私も知らない人を知つてたのかな?それに、また警報がなる前に悪魔の存在に気付いたし、マーマルさんつて人もそれを信じた···何で?

アラカは疑問を抱えながら一階に降りていき

母親と荷物を纏めて地下に避難した

改めて思う

リュリは何者なのか  
本当に人間なのかと

## 第二章 ?

アラカからの連絡を受けて  
ロート中が慌ただしくなった

「警戒体制を LEVEL FIVE に上げて！火属性のシールドを  
街全体に張りなさい！！早く！急いで！」

そうマー マルが指示を出すと人々は動き始める

「カズマ、貴方たちは今すぐに防壁に行つて。リュリと合流して。」

「分かった。蟲の悪魔なんだろ・・・実行班の RED は俺に着いて  
こい、後は地下で指示を待て！」

カズマはそう言つと二十人を連れて防壁に向かつた

「気をつけて、指令班が全力でサポートするわ。」

「ナイフは四本、向こうはざつと数えて五十・・・作り手が一人  
か。」

目を閉じ、聴覚を研ぎ澄ませて情報を収集する

背後から一十人ほどの足音を感じ立ち上がる

「やつと見つけたゼリコリ。どうだ、来たか?」

「見えはしないが、遠くからきっと蟲に乗っているのだろう。とてもない速さでこっちに向かってくる。」

「やうか・・・。ＲＥＤは蟲に備えて武器を構えておけ。」

ロートのメンバーに指示を出すカズマを見てリコリは外を警戒しながらたまっていた疑問をぶつける

「あんなに馬鹿な事をしていたお前がなんでこんな組織の指揮をとっている。」

カズマは後頭部を手でかきながら答えた

「ちょっとした理由があつて言えなかつただけだ、お前と同じだよ。」

「私の事・・・マー・マルから聞いたのか!?」

カズマは初めて振り返つてなびいた前髪の下にあるリコリの右耳を見た

正直、カズマはゾッとした話に聞いていたものより恐ろしく、美しいモノだった

「ああ・・・そうだ、彼女の正体も知つてゐる」

「皆の正体は知つてゐるが自分の事は話さないのか。まあ、私は聞か出しあしない。マーマルが知つてゐる事は全てではないしな」

リコリは腰につけてゐるナイフを一本取り出し即座に投げた

一つの叫び声がトウキョウの数メートル先で轟いた

「来たぞ、お前達には見えない『空』の蟲が」

「何！？」

「私は『空』のをやる。マーマルに~~あれ~~えらぶ、蟲は虫とせ違つもし出来るなりシールドは『靈氣』にしふり。」

「・・・はっ！？何の事だ？『れいき』ってー？」

「言えば分かるー他のヤツはお前よりも見えるはずだー」

防壁を越え砂漠の中へ飛び込む

落ちたナイフを拾い上げるとリコリは目を閉じまた聴覚を研ぎ澄ませる

虫が羽をばたつかせる音だけに集中してナイフを動かした

見えない相手だ・・・いつするしかない・・・

ゞゞん羽ばたく音が消えていく

完全に全て消えた時

田を開ける

実体化した蟲がリコリの足下に散らばっている

「・・・『空』の蟲はやつたか。」

リコリは息を軽く切らしながら真っ直ぐ前を見る

流石にアイツが近くにいないと・・・後はあいつのサポートに

・

すると、腹部の当たりが燃えるように熱くなつた

「君だね、僕が作った鉄の蟲を殺したのは。」

リュリは大きく回り幼い声を振り払った

「くそっ、外したか・・・痛・・・」

わき腹の傷がバツクリ開き、血が流れだす

なぜ気付かなかつた、これほど近かつたのに・・・やはり地下に避難したせいか・・・

リュリの田の前には十代になつたばかりのよつな少年が笑いながら立つていた

「お姉さん、人間じやない・・・なんで、人間の見方をするの？」

少年の手には紫の液体がべつとりついていた

リュリは片手でわき腹を力一杯押さえ、止血をするが白い砂漠の砂を紫に変えていた

「お前みたいな悪魔には分からぬ事だ。」

「ふーん、まあどーでも良いけど。いつまでもこのままだつたら終わんないよね。」

少年は腕を前に出す

「死んでよ、お姉さん」

手のひらが光るとそこから巨大なムカデのよつた蟲が飛び出して来た

「主人、ワタシハ何ヲスレバ・・・?」

「あのお姉さん、殺しちゃって。」

蟲がリュリの方を見る

ゆっくり近づいて来るのが分かつた

ナイフは後三本・・・前よりも巨大な相手、それを作った悪魔・・  
・いけるか・・・?

少し遅かったが傷は半分ほど閉じかけている  
痛みは残っていたがやるしかなかつた

上着を脱ぎ傷口にまいて止血をした  
多少は動きにくくても仕方がない

「カズマ!...聞こえるか!...!」

「聞こえてる!」

カズマ達ロートのメンバーはリュリに言われた通りに蟲を何匹も射  
ち落としていた

「聞くなよ!」

リュリがそういうとカズマは仲間に無線で何かを伝えた

すると、いきなり攻撃を止めた

「えつー…? どうしちゃったの? 降参するの?」

「主人…ヤリマスカ?」

リュリはロートのメンバーを確認すると大きく息を吸つた

「私達は降参なんてしていない…・・・勝つ為に最後の手段をとるだけだ」

アイツがいないなか何処までいける・・・

「まずは『力いのからだ!』」

リュリは口を開けて蟲を見て、目を閉じる

いきなり蟲は苦しみだした

「ナ・・・・ナニガ・・・」

巨大な身体をくねらせ砂の上に倒れた

煙になり消える

「何! ? 何したの! ?」

すると

次々と蟲達が崩れ落ちていく

リュリは息を荒くし

口から紫の血を吐き出した

「後はお前だけだ。」

「待つてよー僕は蟲を・・・」

「もつ、出せない。」

「・・・つえ?」

「私が腕を切り落とした。それなんだろ?、魔法の源は

少年は腕を見ると肘から先が切り落とされ黒い血液が滴り落ちていた

「うわ――――――!――――!

少年は泣き叫びだす

「ひ、う・・・・・・

「お前は人を殺しすぎた・・・・私が逝かせてやる!」

「マジックの種ぐらい最後に教えてよ・・・・・

リコリは少年に背を向け歩き始める

「『謔』だ

## 第一章　？

目を開けると真っ白な天井が広がっていた

此処はどこだ・・・？

勢いよくベッドから起き上がつた

・・・！？、痛くない

そつと傷のあつた場所を触つた

「あら、起きた？」

声が聞こえた方向をすぐに見た

マーマルだ

「そんなに警戒しないでよね。仲間なんだからね一様。」

「すまない・・・外が騒がしいようだ。頭が痛い」

マーマルは笑う

「久しぶりに能力を解放したからよ。外に彼女が来ているわ。」

「そのくらい分かってる」

「ちょっとーーリュリに会わせなさいよーーいるのは分かつてんんだからー！」

カズマが必死に病室に入ろうとするアラカを数人のロートのメンバーで止めていた

「ダメだつていってんだろーーヤツは大ケガしてんだ！」

「だからこそ会わせなつて・・・言つてんのよーー！」

アラカはカズマに飛び掛かり鼻を思いつきり摘んだ

ロートのメンバーは必死にアラカをカズマから離そうとするが物凄く力が強すぎて離れない

「イデーテーテーテーーー！」

「早く会わせなさいーーー！」

「ダメだつでーーいつでんだる、ーーーーー鼻ぎゃーーーー！」

アラカは全く力を抜く様子を見せない  
どちらかというと思いつきり力を入れ続けている

「お前らひつねさいど。静かにしてくれ、耳が潰れる。」

病室の方を見るとリュリが立っていた

「リコリ！！」

アラカがリコリに飛び付く

カズマは鼻から出る血を必死に押さえた

「あつ、『ゴメン！ケガしてるので抱きついちゃて・・・』

「やうなると思って食い止め・・・ハツ・・・」

カズマが呟くとアラカは殺氣をカズマに向けた

すぐにカズマは黙る

「・・・・。傷は大丈夫だ、治った。」

リコリはそう言つて身体に巻き付いている包帯を取つた

「！？」

カズマは驚いた

リコリが悪魔を倒した後すぐに倒れた

あれほど怪我だ立つていい事もできなかつただろう

しかし血液があれほど出るくらいの傷だつた

なのに、数時間しかたつていないので傷がスッカリ消えていた

本当にこの種族には驚かされる。

「リコリ、ちょっと来い。」

カズマはリコリの腕を引っ張つて  
病室に入り扉に鍵を閉める

「ちょっとー！カズマー！」

「なんだ、カズマ。」

「こいつつつもりなんだ？」

「何のことだ。」

リコリは真顔のままカズマに言った

その言葉を聞いてカズマは壁を殴る

「真実だよーお前の正体をアラカにこいつ言つつもりなんだーー！」

「ちょっとーやめなさいよカズマー！」

マーマルが止めに入らうとするがカズマに睨まれ動けなかつた

「約束を果たすまでは言つてしまはない。」

「一番悲しむのが誰か分かつてねーな、お前は・・・」

「ならば、お前から真実を話したひじりだ。気になっていた、なぜお前が紫の血を浴びる事になったのか。通常の武器では私達は貫けない。」

「……。」

カズマは何かを言おうとしたら黙り込んだ

マーマルがカズマの肩に手をのせる

「私も貴女にはアラカちゃんに真実を言つてももらいたいわ。しつかりキズナを結ばないと貴女は……。」

マーマルは言葉を続けなかつた

扉に手を掻け出ようとしたときココロは咳いた

「私は、アイツを守らなきゃいけない……それがソーマの最後の願いだ。」

「だからなんだろ……だから、あんなに血を流したんだろ……。」

カズマが叫びリコリの胸ぐらを掴んだ

「世界がお前を……消そうとしてるんだろ。」

「そうだ。私が人類を裏切つていてると思つていてる。」

カズマは手をゆるめた

「あの叫びをアラカにだけは聞かせないでくれ」

リュリは何もかえさず病室を後にした

「こんな俺でも、一応アイツの幼なじみなんだ・・・」

「ホンのどにか

トウキョウのすうと遠くにあるといひで一人の男が報告を受けていた

「偵察が敗れたか・・・」

「はい、でも想定内でしたが。」

報告をしている長髪の女性は笑顔を崩さなかった

「ソティアはいるか。」

「はい、王様～僕はここにいますよ～う。」

壁から一人、十五歳くらいの少年が出て来て  
男の前の立つた

「トウキョウへ行つて人間を抹殺してこい。お前なら一日ができる  
だろう」

ソティアはヘラヘラ笑いながら頭を下げて床の中へ消えていった

「では、私は戻ります。」

「赤い血は全て始末する。・・・黒き血においてな・・・」

女性は後ろを向き歩んでいくと透明になつて消えていった

「あーっ！だからそこはもういいじゃないって。」

翌日リコリはアラカに携帯電話の使い方

（と言つても、初歩的な事だけだが）を教えてもらつていた

一つの動作にかれこれ二時間費やしている

「だから……もう、そこを押すと電話切れちゃうんだって。  
じゃあ、もう一回」

「わかった。」

リコリの顔は変わることはないが汗だけは軽くでていた

『聞こえていますか？リコリ。』

人間には聞こえない声がリコリの耳に入ってきた

「アラカ、すまない。急用を思い出した。続きは後でまた教えてくれ。」

そつぬうと席を立ち

店をでていった

「まあ・・・一時間もやつてたら嫌にもなるよね。」

『もつ大丈夫だ。話せる』

リュリは人気のない路地裏に入り声と話す

『その感じからするとキズナに正体を明かしていないのですねリュ  
リ。』

少しため息をついて壁にもたれる

『私にはやらないといけない事がある。それが終わったら言つや』

『貴女らしい理由ですね。それより、ソティア達一人がそちらへ行  
くそうです。』

『奴らか・・・厄介だな。』

『私の予想では貴女の力を最大限に使わないと彼らは倒せないです  
よ。どうするんですか?』

『どうにかするさ・・・私はこの街を守らなければならない。』

『負けないように、あの子を悲しませないよう頑張ってください。

』

声はすつと消えていった

あへ・・・奴らのせいでやる事が増えたな。

## 第一章　?

まずは、この事をマーマルだけに伝えなければいけない

リュリはポケットの中から携帯を取り出すが少し考えて閉まった

さすがに練習中とはいえ

誰かに聞かれでは困る

ビルを飛び越え、直接言いに行つた方がいい

そう考えたリュリは早速行動にかかつた

奴らが此処へ来るまで最低でも一、二時間はかかる。それまでに避難を・・

「それは本当なのね。」

「トウキョウがピンチなのに嘘なんかつくはずがない。」

普段はすぐには会えないが、運が良いのか珍しくすんなり彼女に会えた

「なんでも良い。なにか理由をつけてトウキョウとは違う場所に人

々を避難させないといけない。」

マーマルは少し考えた

リュリの考えが分かると  
彼女はリュリの肩を掴んだ

「・・・・!?. ダメよ! リュリー 一人で・・・」

「やるしかない」

「それなら、私たちも・・・」

リュリはマーマルを殴つた

マーマルは床の上に倒れ驚くようになり見開いていた

リュリの腕は通常とは違つ方向に曲がっていた

「お前は、防護型だらう・・・これが証拠だ。」

「・・・それは貴女が、彼女にし・・・」

「関係ない。とりあえず伝えた。後は任せせるよ・・・」

リュリは部屋を後にした

そんなに悲しそうな背中で言われても、説得力ないじゃない

「マークはそう思つた

背後から声が聞こえる

「ウチの存在、ばれてたかな？マーク」

「わざとばれてたわ」

部屋の奥から

一見、男の子に見える少女がひょっこり現れた

「あと、正体もね。」

「ふーん。なんで分かるんやろ、不思議やな。」

マークは彼女の方を見ると肩につこうとしているホコリをはらつた

「『音』よ。音を聞いているの。」

「音？なんでもまた？」

大きな机にある椅子をマークはひき、彼女に座るように囁いた

「そんな事より。トウキョウに住む皆様にお伝えします。第一避難

「せやね。・・・トウキョウに住む皆様にお伝えします。第一避難所に集合してください。」

スズネはさつきまでとは別人のようにマイクでアナウンスをした

「一人のじりず、全員第一避難所へ。・・・・こんなもんかな？」

マーマルはそう聞いてきたスズネに笑顔で答えた

「文章考えたの、私じゃない。で、私たちはどうあるの？私のキズナ」

「彼女が言つ通つにはしゃん。全力でトウキョウを守る、君の力で。

」

スズネのアナウンスで静かだつたトウキョウは騒がしくなつた

何が来るのかは知らない

しかし、なにかしらの危険が来る事は皆分かつた

「リュリ！なにがあつたの？アナウンスで避難所へ行けって。」

予備のナイフを出来るだけ装備をしているリュリにむかいアラカは  
問い合わせる

リュリは手を止める事無く、準備を進めた

「アラカ、お前は早く行くんだ。」

「でも・・・、行けないよ！リュリがこの前みたいに傷ついて帰つ

てぐるぐらいだつたら私も・・・・・！」

そつ言うとリコリはいきなりアラカを抱き締めた

リコリの思ったよりも冷たい肌がアラカの頬にぶつかる

「リコリ・・・？」

「・・・・・」

「どうしたの？」

「まさか・・・これほど早く・・・」

アラカはそつと目線を下げた

鉄の長い爪の様なものがリコリの背中に突き刺さり  
血が出ていた

紫の血が・・・

「外したあー、せつかく探し出したのにいー。」

痛みをこらえて背中に突き刺さる爪を抜くと  
声の方向に投げた

だが、そこには壁しかない

「よくうへ僕の場所が分かつたねえー。」

「どうせ、ヤツも来ているんだろう。」

「『ヤツ』ってえ、キズナの事ある？ 来てるよ、光が邪魔してえ、通れないとえ、待ってるんだあ！」

マーマルか・・・あれほど言つたのに・・・

そのとき、アラカの頭の中は混乱していた

紫の血は人間のものじゃない

じゃあ、なんでリュリは私を助けてくれた？

「アラカ、大丈夫か？」

リュリの優しい声が聞こえる

「お前を安全な所へ連れていく。そこで・・・」

リュリは何かに戸惑つたようだった

「全てを話そう。」

また、あの悲しそうな顔だ。

アラカは少し頷く

すると、リュリがまたアラカを抱き締める

「しっかり、抱まつていろ！」

そう、言って走りだした

いつもより速い

機械よりも速かつた

窓を突き破り外へでる

アラカはその時リコリにしがみ付きながらもリコリが怖いと思った

## 第一章　？

リュリとアラカは路地裏に降りた

もう、皆避難したのか誰もいない

「リュリ・・・本当の事って・・・」

まだリュリの身体からは紫の血が滴り落ちている  
少し息もあがつていてし苦しそうにも見えた

「・・・十年前、まだ人間と悪魔が殺し合いなどしていないと  
に私はトウキョウにいた。」

アラカは驚きを隠せなかつた

「十年前つて私、五歳！おかしい、二年前に初めて会つたんだよ！」

「そのときのトウキョウはもっと広かつたし、砂漠など一切無かつ  
た・・・つ痛。だから、気付かなかつただけだらう」

リュリは話ながらズボンの生地を破り止血をした

「アイツ、執念深いな・・・毒まで塗つてあつたか・・・。アラカ、  
お前が思つてゐる通り姿形が人型をしてゐるだけで私は人類ではな  
い。」

「なんで、私の考えが分かつたの？」

リュリは壁にもたれ座り込んだ

「顔を見れば分かる・・・いや・・・、まさかな・・・」

自分の体力が切れるのがわかる

力が全く入らない

「・・・リュリ？・・・リュリー？」

「私の血の臭いを追つてさつきの悪魔がくる・・・。安全な所へ行  
け・・・そして、生きろアラカ」

涙を流すアラカは笑つた

「リュリ・・・泣きながら言われても、説得力がないよ。」

リュリは気付いていなかつた

自分の目から涙が出ている事に

少しするとカズマが一人の所にやつてきた

「おい！大丈夫か！？」

アラカは必死に泣きながらリュリに呼びかけていた

「大丈夫じゃねーな……。」

「どうしようー！リュリが、リュリが！！」

カズマはリュリの近くにいき  
口元に手をかざした

・・・！？息をしている？？もしかすると

「アラカ、よく聞け。リュリはからうじて生きている。今から言つ  
ことをやるんだ、いいな？」

アラカの目を見ながらカズマは力強く言つた

リュリがはめている手袋をカズマは外した

彼女の左手の甲には薄ら刺青の様なものがある  
それを見るとアラカは少し驚いた

「これ・・・私もある、右手に。」

そう言ってアラカは自分の手袋を外した

同じような刺青がアラカにもあった

カズマは確信するように頷く

「手を握るんだ。それだけで、リスクを背負つ事になるがリコリは助かる。」

「リスク……。それでも良い。親友を失うよりずっと……」

アラカがリコリの手を握った瞬間

風がどつと吹きリコリの姿が消えた

「やつたのか……？」

カズマが突風に少し驚きながらアラカに言つた

アラカは笑いながら泣いた

「こるよ。リコリはあそこに。」

アラカの指差す方向には

まわりを見渡す白く輝くドラゴンが飛んでいた

『リコリは……トウキョウか？』

頭の中にリコリの声が響くと答えるようにアラカは頭の中でリコリに呼びかける

『さうだよ、トウキョウだよ。リコリ……生きてて良かった。』

白いドラゴンは一度『空』になると人型のリコリになつた

おもいつきりアラカに飛び付かる

「良かつた！良かつたよー！」

泣き叫ぶアラカに対しリコリはキョトンとしてカズマを見た

「リコリ、テメー次は絶対にアラカを悲しませるなよ。」

「分かつて。アラカは本当に良かったのか？」

リコリはそっとアラカの目を見るとアラカは無言で頭を縦に振った

「なら、ヤツを倒しに行こう。マーマル達も限界に来ている。」

素早く装備していたナイフをなげた

リコリは壁に向かって睨み付けた

「いつまでいるつもりだ。ソティア。」

笑いながらナイフの突き刺さる壁からソティアは出てきた

「生きてたんだあー。リコリちゃん」

ソティアを睨み付けるリコリはゆっくり上着を脱ぎアラカに渡した

「これを持っていてくれ。」

「わかった。頑張ってねリユリ。」

ソティアは笑いを止めようとはしなかった

むしろ、リコリを襲つたときより笑っているように見えた

「そっかあ～君がリユリだつたんだね～。気付かなかつたよ～。」

リユリはソティアを無視してアラカに話し掛ける

「アラカ、カズマが言つていたリスク一つ目だ。」

「何個もあるんだ、リスク・・・・。でも後悔はしないよ。」

リユリから預かつた上着をギュッと抱く

「ドラゴンはキズナを持つと、戦闘時にキズナを守る以外は思考はキズナのモノ。」

「どうゆうこと?」

リユリがいきなり振り向きアラカとカズマを伏せさせた

アラカは咄嗟に口を閉じた

その瞬間、緑色のドラゴンがソティアの近くに降り立ち人型になった

「ノリの時ですよ。お嬢さん。」

ソティアは爆笑した

「な～にも分かっていないみたいだよ～。でも～リユリちゃんに会えて良かつたね～ミックう～」

ミックと呼ばれてドラゴンはリコリとは少し違つ感じがした

アラカは口を開けるが真つ暗だった

『リユリ?』

「カズマはわからんがアラカは助かつたようだな。」

一気に周りが明るくなる

一瞬でリユリは翼だけを出して一人を包み込み、攻撃から身を守つてくれたのだ

「カズマ、大丈夫か?」

「大丈夫だ。話には聞いていた。アイツ、水の『膜』だろ。」

ミックは手をたたいた

まるで、正解だと叫びつつ元

「関係ないんですけど。リコリ、貴女は無事ではないのでしょうか？」

ミックは指で自分の目を指した

リコリは動じていない

「…………？」

アラカはリコリの目を見たがリコリは見返さなかつた

「目が見えていないんだろ。リコリ」

「そんなことは問題ない。何より大変なのは口イツらをどひするかだ。」

リコリがそう言つとアラカは額き、走りだした。

「おこーど行くんだ！」

「カズマ、アラカについていけ。」

わけの分からぬままカズマはアラカの後を追い掛けた

「これで良い。いつでも来ていいぞミック。」

身体を細かく震えさせたミックの顔は怒りに燃えていた

「十年前もだ・・・・目見えなくしてもお前は顔色一つ変えずにいた・・・・ムカつくんだよ！その顔が！！！」

腕を壁に打ち付け建物を崩壊させた

ミックは前髪を搔き上げ  
深呼吸をする

「此処じゃ狭すぎます。もっと広い所へ行きましょう。」

「その意見、のもつ。」

「ど」「行くんだアラカ！」

「ソラ爺の所。リコリが『月光を持って来てくれ』って。・・・  
今のうちに教えてカズマ。残りのリスク・・・」

カズマは口をつぐんだ  
少し考える

「どんなに過酷でも、大丈夫か？」

「大丈夫。」

「分かった。お前が気を付けなきゃ行けない事は、死ないこと。」

「エーハウス」とへ。

「ゾーラゴンも一緒に死ぬからだ。それと……」

カズマは続きを言おうとするがなかなか声が聞こえない

「……キズナを結んだドーラゴンが死ぬと、ビーリーによいがドーラゴンの叫び声が耳を閉じても頭の中に轟く。」

「わかった。ありがと、カズマ。」

ソラ爺の店の前に着くがやはり避難したのだろう店は閉まっていた

「ダメだ。開かない、きつと逃げたんだ。」

「こるよ。ソラ爺はこる。」

そのまま下がると扉に向かって突進した

すると、扉が開きアラカはそのまま入つて行つた

「やるな……アラカ」

「ソラ爺……いるんでしょ……返事……ソラ爺。」

隠し扉からソラ爺は姿を現した  
キリヤも一緒にいる

「静かにしろ。敵に気付かれたらどうするつもりだ。」

「大丈夫よ。リューリが今戦つてゐる。リューリからの伝言、『月光』を渡してくれつて」

『月光』の言葉を聞き  
ソラ爺は笑顔を見せた

「そりやか！ 使つ氣になつたか！ 今から持つてくれるよ。」

ソラ爺が作業場の方へ行こうとするアラカはソラ爺の腕を掴んで止めた

「なんじや、いらんのか？」

「オリジナル・・・『竜牙』も一緒に渡して。」

ソラ爺は表情一つ変えなかつた

「父さん・・・もう、いいだろ。あれをリューリに返そつ。」

キリヤが小さいながらソラ爺につたえた

「分かつた。返そつ・・・。だがなんで分かつたんじや？ 此処にある事。」

「分かんない。本人に直接聞いて。」

その頃、リコリはミックとの対決の為に砂漠にいたもちろん、此処に来るまでに人など一人もいない

「自分を不利に置くつもりか？」

「目が見えていない貴女に言われたくないです。」

ソティアは防壁の上でそのやり取りを見ていた

「前回は本気でない貴女に負けてしまったので、私は貴女を本気にさせます！！」

ミックはそう言つてドラゴンになつた

でも、リコリはただナイフを構えただけだった

「ミックう～やれるよ～」

ソティアは笑いながらミックを応援する

アラカが戻つてくるまで持ちこたえてみせる

仕掛けてくる攻撃を紙一重で避けていく

『音』を頼りに

ミックの動きが鈍った瞬間ナイフを投げた  
金属音が聞こえる

やはり、普通の武器ではダメか・・・

ドロゴンの皮膚はどんな鉱物よりもずっと固く、普通の武器では傷一つ付けることはできない

今のリコリには反撃はできない

「あなたに科学が発展しているらしいのに、刃物使うんだあ～」

「違いますよ。ソティア、彼女は機械と言つものが扱えないだけなのですよ。そうでしょう、リコリ。」

ソティアが放った言葉にミックが応える

「・・・五月蠅いんだよ。」

「はい・・・?」

リコリは新しいナイフを取出しながら言った

「銃と言つ機械は五月蠅いんだ、周りが分からなくなるほど。その点、コイツは私が作った物だから丁度、周りが見えなくても確実に確認できる。」

ナイフを人差し指で弾くと周りには高く、低い音が響きわたった

「何の真似だ・・・リコリ。」

「お前が私に勝てない理由だよ。ミック。」

キレかかっているミックにリコリは冷静に応えると  
薄い球体の様なモノが周りに浮いているのをリコリは感じた

「コレは・・・」

その球体はリコリの右足に当たると爆発を起こした  
瞬間的に身体を動かし完全には当たらなかつたもののリコリは痛み  
に顔を歪ませる

嬉しそうなミックの声がリコリの耳に入った

「私も成長したんでしょう。いつの間にかこんなことが出来る様になつていきました。」

「膜の中に真空を作り出して、膜を一気に破裂させた。そうだろ。」

ミックはその言葉に笑う

「当たりです。では、死んでくださいー。」

ミックは大量にシャボン玉を作り出しリコリの周りに浮遊させた

僅かな隙間を通り抜けリコリは避けていくが  
足のケガのせいかなか動けず、いくつか当たってしまう

・・・・・。このままでは私が死ぬな、少し力を使うか・・・

ミックは今までよつねの玉をリコリに集中させた

「裏切り者は抹殺します！キズナさえ殺さなければ貴女は・・・！」

リコリの方を見ると玉は彼女には当たつておらず  
少々離れて浮いていた

まるで、何かに押されている様に

「何をしたんだ！！リュリ！！！」

その光景を見ているソテイアも驚きを隠せない

すうい、初めてたよう。ミッケか」なんにも怒ってる所。

玉は一気に割れると

今は集中してこの球体に・・・

ミックが叫んでいる声や周りにある音を全て聞かないようにしてリコリは集中した

少しすると球体はいつきに爆発した

「触れてもいらないのに爆発した・・・でもあの距離です。私の勝ち・・・」

人の形になりながらミックは我慢していた笑いを解き放つかのよつにおもいつきり笑つた

「あははーーーやつとだーーーやつとお前に勝てたーーー」

「やつと、能力を解いたな・・・ミック。ゲホつ・・・」

砂ぼこりの中から無傷のリコリが現れる

その手には黒い刀が握られていた

「なつ・・・・・」

ミックは驚きを隠せない

「昔からだ、お前は私に質問とケンカばかりふっかけてくる。」

一瞬でミックの前に刀を構える

いつの間に！見えなかつた！

ミックは膜を即座に作り後ろに下がるが上着に切れ目が入つた

膜と一緒にリュリが刀で斬つたのだ

「間に合つて良かつたあ。」

「ギリギリだつたな。アラカ。」

防壁の上でアラカとカズマは座り込んだ

「それにしてもなんでかけっこトウキョウ一遅いお前があんなに早くつ・・・！！」

アラカはカズマの腹に思いつきパンチした

「リュリが力くれたんだ。時間がかかるのはやばい戦いだつて言つたから、少しだけリュリの力をね。」

立ち上がりつてリュリを見た

ミックとの混戦が続いている

「頑張つて、リコリ。」

「なんでだあ……ミックが押されてるう……！」

ソティアが飛び跳ねながらイラついていた

「ただの刀なのにい～！！」

「そこの悪魔。あれはただの刀じゃねーぞ！」

カズマが腹を押さえながら立ち上がり言った  
防壁の手すりにもたれかかり話しを続けた

「『月光』はその辺に転がっている金属で作られている訳じゃ無い  
んだとさ。なあ、アラカ。」

「えつ！」

無茶ぶりしてきたカズマに少しキレる気持ちを少々押さえながら

「私は良く分かんないけど、リコリはあの刀を見て『オリハルコン  
で出来て』いるってソラ爺に言つてた。」

「それがどうしたのさあ……金属は金属じゃん……ドロゴンには  
きかないよ～！」

カズマがクスリと笑い戦っている方を見る

「悪魔だけど知らないことつてあるんだな。オリハルコンはな、悪

魔が昔からじつてゐる魔法で出した『この世には存在しない』金属なんだよ。」

ソティアだけでなくアラカも驚きを隠せなかつた

「あははあーなるほどねえ。分かつたあーありがとう。」

ソティアから殺氣が放たれカズマは銃を構えながらアラカを庇う

「見てるだけってえへ飽きちゃつよねえ。」

ソティアは今まで以上にニッコリ笑つた

リコリは刀、ミックは爪で攻防を続けているがほとんどの攻撃はリコリからのものだった

「ここまで続けるつもりだミック。」

「貴様が本気を出すまでだ！早く本来の姿になつて戦え！！」

またシャボン玉を作り出してリコリを攻撃するが全てが相殺されてしまつ

「釣り合わなくなるぞ、刀一本でそれほど傷ついているの？」

リコリはそう言つが彼の怒りは頂点に達し  
聞く耳をもたなかつた

仕方がない《竜牙》を抜くとするか

腰に装備していた《竜牙》を抜きミックから少し距離をとつた

「刀一本増えただけで何になる……！」

ミックが攻撃を仕掛けた瞬間

頭上高くまで飛び上るとミックの巨大な両腕を切り落とした

紫の血を浴びながらトウキョウ中に響き渡る叫びを聞く

刀に着いた血を廻<sup>アラ</sup>き払い鞘に収める

「諦めがついたか？お前は私を本気にさせるほど強くないんだ。」

人型になり砂の上で腕の再生をし始めるミシクを見つめながら囁つ

「くくく・・・・・・

「何がおかしい？」

「貴女は何かを忘れている。」

「まさか・・・・・・・？」

首に違和感を感じ始めると急に苦しくなつてきた

「ソティアがぶちギレたみたいですね。あの男も無能なモノですね。  
彼から懐かしい臭いがする。」

「それ以上言うな！」

リコリはナイフを取り出そうとしたが力が入らなかつた

「クソッ・・・止める。」

傷だらけのカズマがソティアに叫ぶがソティアはその手を緩ますことはなかつた

「彼女のキズナはあ～僕のキズナの両腕を切り落としたんだ～。おあいこでしょ～コレくらいしたつて～。」

アラカの首を絞めながら笑顔でカズマの背中を踏みつける

「君もさあ～いつになつたら死んでくれるのあ～？」

首を締める力を一気に強める

「止めて欲しいなあ、ウチらの仲間殺すの。」

「あんた、誰え～？」

ソティアの腕を握り口を開く

「ウチは、スズネや。」

何かの力で身体が押されソティアは吹き飛んだ

アラカの身体をスズネが受けとめる

「可愛い顔して氣い失つとるな・・・。カズマ大丈夫かあ？」

カズマは起き上がり鼻からでる血を拭つた

「アラカよりかは無事だ。それより、リュリは・・・」

「彼女なら無事やけど、まだ、あのドラゴンと対決しどう。」

リコリ達の方を少し見るとアラカをカズマに渡した

「ちよつ・・・」

「まだ終わつとらんよ。はよ病院連れてき。」

カズマは頷き走つていった

「スズネえ～？だつたけえ～？人間じやないねえ～  
いやる。」

「せやけど、なんか悪い事でもあるんか？人間の味方したつて悪な

ソティアの言葉に笑つて返した

「帰つたらあ～王様に言い付けちやおう～」

すると彼は防壁の中に消えていく

「ウチは都合のええ相手に当たつたらしいなあ。」

背後にソティアが現れスズネに殴りかかった

「ー?」

しかし、その拳はスズネの身体をそれでいた

「残念。」

ソティアの腕を握り動けなくすると腹を思いつきり殴った

「あんたはトウキョウから任せくんよ。」

「気を失ったソティアはその場に倒れると直ぐにマーマルが現れ彼を受けとめた

ふらついたスズネは防壁の手すりにつかまりため息をつく

「久しぶりに力を使ったからせいかな、めった疲れたあー。来てく  
れて助かったわマーマル。」

「むしゃしゃ。」

「むしゃじとるんはウチだけじゃうで。あっちの方が力解放したん  
久しづらやうつ。なあ…リコリー！」

遠くでミックを抱ぎ上げ

こちらに向かうコリに呼び掛けた

「お前の事など知るか。」

## 第二章　?

ミックの気配が消えた？

廊下を歩く燕尾服を着た長髪の男はその足を止めて外の方をみた  
まるで我が子を心配する様に

「どうかしましたか？アオガさん。珍しく外を見ているなんて。」

「レイア・・・ミックの気配が切れたように感じてね。私は君の様  
に遠くの状況は分からぬから心配で・・・」

レイアと呼ばれた白髪の女性は耳を澄ますようにして少し笑った

「心配いつません。彼らはよくやっていますよ。」

「君が言ひなら安心したよ。人間達に我々がやられる事は無いから  
ね。」

『誤魔化してくれたのか、ありがとう。』

『私はそれくらいしか出来ません。貴女も良く頑張りましたね、

リコリ。『

姿無き声と会話をするリコリはあの日から丸一日ずっと寝続けていたアラカの隣に座っていた

『私は何もしていないよ、アラカが頑張ったんだ。』

『さすがあの人の娘さんですね。キズナになつた初日にリンクを使うなんて、貴女が教えてもらいないのに。』

『もしかしたら……アイツがアラカを護つているのかもな……』

『……やうですね。』

扉の音が聞こえてリコリは立ち上がった

「どう? アラカは。」

マーマルだ

手には袋を持っている

『まだ寝たままだ。いつ起きるのか私にも予想できん……』

『そう。私のわがままなキズナが呼んでるから直ぐに行くけど……』

『

そう言つてマーマルは袋からパンを取出しこりに投げた

「差し入れよ。貴女、ずっと何も食べてないでしょ?』

』

「すまん。」

リコリはパンを受け取り、口をつけた

「ふふ・・・ヤツパリお腹空いてたのね。」

リコリはマークを睨むがそれを無視して彼女は部屋を出ようつとむると思いついた様にリコリに向った

「私もそつだつたけど、ドラゴンの事かなり説明しなきゃいけなくなるわよ。」

「・・・・・。」

リコリは何も言わずに窓の外を見た

早朝だからか朝焼けで赤く染まる空が一面に広がっている

私が歩んでいる道はお前が望んだ道か？ソーマ・・・

そのまま、うずくまり  
自分の身体をギュッと抱いた

「大丈夫、俺はいつも傍にいる・・・。」

「そのセリフ・・・ヤツパリ、あのリコリなのね貴女は・・・。」

ふと声の方を見ると扉の前にアラカの母親が立っていた

母親はベッドの横にある椅子に腰を下ろして寝ているアラカの顔を

そっと撫でた

「セリフ……？何のことだ？」

まるで、何もしていなかつた様にリコリは言った

「なんでもないわ。」

「十年前と同じ顔をしていたら気付くだろ？」「

リコリはうずくまつたまま会話を続けた

「でも、それは彼が望んだ事なんでしょう？『貴女にはそのままでいて欲しい』って

『家族を頼む』とも言っていた。死ぬ間際に……」

「だから此処に戻ったのね。」

リコリは目線をそむける

「次のキズナはアラカだった。これは定めなんだ、許して欲しい。自分でも決められないんだよ。ユリカ……」

ユリカは涙を浮かべながらうずくまるリコリを抱き締めた

「……？」

「良いのよ。むしろ、貴女が来ててくれて良かった。貴女がアラカのキズナになつてくれて……」

少しの間、リュリは肩を震わせた

しばらくすると母親は部屋を後にした  
疲れていたのかリュリがそのまま眠りに着いたからだ

「リュリ、リュリ起きて。」

そつと目を開けるとアラカが微笑む姿が見えた

外を見るともう暁だ

「泣いてたの？ひどい顔してるよ。」

頬がかすかに濡れているのが分かると眠りに落ちる前の事を思い出  
しリュリは顔を赤くした

この歳になつてまた泣いたのか・・・

涙を拭い大きく息を吸つた

「気のせいだ。アラカは大丈夫なのか？」

「私は大丈夫。元気モリモリって感じ！」

そう言つてガツツポーズを見せるリコリは少し笑つた

「ねえ。」

「なんだ？」

リコリをまじまじと見てアラカは呟いた

「本当にアラゴンなの？人みたい。」

リコリはその言葉に目を丸くすると、なぜかマーマルの言葉が頭をよぎった

「はあ・・・・。人と共に生きる為に人型になつてているだけだよ。その証拠に」

机の上にある《月光》を手に取ると自分の手のひらにグッと押しつけた

そこからは紫色の血がこぼれ落ちる

「血は人間の赤でも魔の黒でもない、それにこの血は万病の薬にもなる。」

すぐに、その傷は消え元に戻つた

「それに回復力も人以上だ。納得したか？」

「うん、と・・・とりあえず。じゃあさ、リコリは火とか吹くの？ 映画みたいに」

リコリはため息をつき  
首を横に振った

「良いか、まず、私は火は吹かない。私たちドラゴンはこの世界が自然を創る為に現れたモノなんだよ。四元素と呼ばれているモノ達が淋しがらないように。」

「四元素？」

リコリは額ぐと近くにあった紙の上に漢字を四つ書いた

「『空』、『火』それに『土』と『水』だ。計四人、長となるものだ。まあ、『イツらもドラゴンなんだが。』

一つ一つの漢字から枝を伸ばしていく、更に話を続けた

「例えば、私は『音』を司るドラゴン。昨日攻めてきたミックは『膜』を司るドラゴンだ。つまり、長達が造り出した自然に有るもの。長の子供と言つたところか。」

「ふーん」と納得する様にアラカは言つたが、何かに気付く様にリコリを見た

「木とか電気は?とりあえず自然の一部じゃない?四元素だったら何になるの?」

アラカがそう言つとリコリは険しい顔をした

「『ゴメン、なんか大変な事でも言つた?』

「いや、なんでもない。そいつらは特別な部類に分けられている。  
ドラゴンの事はいい、これから必要な事、キズナについて言つぞ。」

「はい、先生。」

アラカは笑つて驚く様な顔をするリュリを見つめた。

とつあえず、腹<sup>はら</sup>しらえをかねながら  
食堂で話しをする事になった

いつも通りにアラカの母親であるユリカが全部大盛りで食事を出してくれた

「お母さん、いつもより多くない（いつも多いけど）？」

「ちょっと色んな事が吹っ切れたから、多めに作ったのかも。」

ユリカがリュリを見るがリュリは目を瞑わせなかつた

「かもつて何？なんかあつたの？」

「さあーねえ。」

そう言つて席を立つていった

「めんぢくさいなあ。ね、リュリ。」

リュリを見ると顔を赤く染めていた

「えつ、ああ、そうだな。」

「なんか知つてるの？」

「いや・・・何も知らん。」

アラカはモヤモヤしながら話しを元に戻した

「そもそも『キズナ』って何？友達の絆みたいなのは違つの？」

「違う。」

食べ物を口に運びながらリュリは速答した

「人が思つて『絆』と私たちが言つ『キズナ』は全く違うモノだ。」

「昨日はなんかよく分からぬけど、カズマが言つてたよね。リスクがあるって。」

食べる手を止めアラカを見るリコリの顔は真剣になる。

「だいたい聞いたから、そこは分かるんだ。でも・・・なんでキズナを守るの？自分たちも死んじやうから？」

アラカは少しうつむいて言った

「そう思つて助けるやつも居るかもしね。でも私はそうは思つていない。自分のキズナに叫びが聞こえてもキズナ・・・大切な者には自らの身体が死のうが生きていてほしいんだ。」

その言葉を聞いたアラカは涙目になりながらリュリを睨み付け

両手で音が出るほど彼女の顔をはさんだ

リュリの肌はやはり氷の様に冷たい

「」とにかくからつて言葉まで冷たくしないでよ。」

「アラカ・・・」

「一緒に生きていて死んでいったら良いじゃない。」

「顔を見ると悲しい笑顔をしていた  
そつとアラカの手を顔から離す

「そう思つ理由を教えよう。ドラゴンは死ぬが肉体だけ、その意思や記憶はそのまま転生へと使われる。だからある意味、ドラゴンは死なないし転生すると例外を除いては元のキズナのところへ行く。自らが同る自然を途絶えさせないために、自分の意思とはかんけいなくな。」

アラカは涙拭いリコツの目をみつめる

「じゃあ、私はリコリと一緒に戦うからね。何もできないかもしけなえけれど・・・」

「その気持ちだけで十分だ。それより、昼食こんなに残してはいけないよアラカ」

いつの間にかリコリ昼食を間食していた  
アラカはリコリはドラゴンだからこの量が食べれるのかと自己解決して

本人には聞かなかつた

結局アラカはリコリの手を借りて完食した

\* \* \* \* \*

「もつお腹一杯だよ。」

お腹をそすりながらアラカは道を歩いていく傍りで歩くコリは満足そうな顔をしてこの

「あのお母さんの勢いでいくと確実に夕食もあるの量だよね・・・減りとかない。」

「私はもう少しも良かった

リコリの言葉にアラカは足を止めた

「なんだ?どうしたその顔?」

「な・・・何でもない・・・」

「マモルー居るかー!」

防壁の前まで来ると門番のマモルにリコリは呼び掛ける  
すると小窓からマモルが顔を出した

「どうした?コリ、珍しいじゃないか。いつもなら無断で昇つ  
ていくの?」

「いつも、無断なんだ・・・

本当にリコリがどういう性格か分からなくなってきた

リュリはそう思つアラカの事を無視してマモルとの会話を続ける

「今日は上に昇りたいんじゃない、砂漠に出たいんだ。だから門を開けてくれ」

「アラカちゃんも一緒に行くんだろ」

「大丈夫だ。私がついている。」

そう言いながら腰につける二ホン刀を触つた  
それを見るとマモルは防壁の中に入つて行くとすぐに扉が開く

たまにリュリを迎えに来ると見ていた砂漠  
でもアラカは初めてその砂漠に足を踏み入れた

少し怖い

「行くぞ、離れるな」

「うん」

リュリの姿を見失わないように感覚を狭くして歩いた  
生き物がいるかどうか分からぬ砂漠を進む

トウキョウが分からなくなるほど遠くに来るヒリュリが足を止めた

「ここまで来たら良いだろう。アラカ」

腰の《竜牙》をベルトから外すとアラカに投げ渡した

「重つ！」

「お前が言つたんだね、自分に刀を教えてくれつて、それくらい受け取れなくてどうする。」

「初めてなんだからしょつかないでしょ……？」

『竜牙』の柄とこひを見ると何かが彫られていた

「ソー……マ……！？」これつて、お父さんの……」

「お前に渡す。」の時がくるとは思いたくなかったんだが。

リュリの笑顔はいつもより悲しそうな顔をしながら話しかけてくれた  
ドラゴンはキズナが死ぬとキズナだった人が強く思つ人のキズナになるんだそうだ  
それで、リュリは偶然なのかずっと私の家系の誰かのキズナになつていて  
『竜牙』はそのなかで一番仲が良かつた私の父が使つていた物なんだ  
だそうだ

「お父さんが私を強く思つたのね。」

「ああ。だから私はお前の前に立つていて。」

リュリはそう言つと『月光』から刀を抜き鞘を握つた

「さて、お前は父を越えられるか」の田で確かめてやる。アラカ、  
お前は真剣で來い。」

「でも・・・分かつた」

ふらつきながらも鞄から刀を抜き、田を閉じるリュリに斬りかかる。

直ぐに払われ砂の上に倒れる

「いくらでもかかつてこい、私を今の場から動かせ。」

「分かつた！」

何回も何回も繰り返されるとリコリは田を開き少しアラカが楽できるようにした

「これ以上は力は抜かないからな。」

アラカは返事もせずにリコリに斬りかかる  
しかし、それはまたリコリには当たらなければ  
リコリの足を動かす事も出来なかつた

「リコリ！休憩しよ！さすがに無理だよー三時間ぶつ通しはー<sup>1</sup>  
倒れたりコリはタイムのマークを使いリコリに言つた  
それを聞いてリコリは微笑を浮かべる

「リコリ・・・？」

「まだまだだな、アラカ」

その言葉はリコリではない誰かだつた  
アラカは立ち上がるともう一度リコリに斬りかかつた

「リコリの中から出てこつて！ーーー！」

「ーーー？」

我に帰るよつにリコリは刀を素手で受け止めた  
驚く彼女の手から血が吹き出す

「どうしたー？何があった？」

「リコリ！――」めんない！手が！」

「指が一本切れただけだ、問題ないよ。直ぐに回復する。」

すると切り落とされた親指の付け根は一瞬で再生した

アラカはほつと一安心するとさつき起こったことを説明したがリコリはそんなことを言つた覚えはないと言つ

「もしかして、リコリの能力だつたりするのかな？」

「それはない。今までそんなことはないし、私が司るモノではない。」

「幽靈的なものがさつき思い浮かんだ？」

その言葉で二人の間に異様な空気が流れた

「とつあえずだ。もう遅くなつたことだし、帰るか。」

「やうだよね。お母さんも心配するし。」

二人はわざわざ起こつたことは無かつたことじた

しかし

リコリは自分の中になにかを感じていた

## 第三章　?

真つ暗な何もない空間に一人中学生くらいの少年がいた  
ただただ生きるだけ、この暮らしをもう十年近くしている

そこに一人の女性が入ってきた

「まだお前のキズナの名を言わんのか？」

「それはちげーぞ。分かんねーだけだし。」

「いつまで嘘をつき続けるつもりだ？死ぬぞ。」

女がそう言つと少年は笑つた

「もう右目は見えてないし。普通の人ほどの体力しかねー。」

女はその空間を去ろうとするとき少年は呟いた

「息子でもキズナが人間だつたら殺すか？」

「それは分からん、王の意思による。」

「バッカみてえー。おんなじ人類の癖にのよ。」

その言葉を聞いて女は暗い空間を後にした

少年は呟いた

「今より十年前の方が良い。」

\* \* \* \* \*

「すいません！通してくださいー！」

朝市で賑わう人混みの中一人の青年が走り抜けていた

「またソラ爺さんのパシリカキリヤー！」

周りの人達が色々話しかけてくる

「そんなこと無いですよー急いでるんで、失礼しますー！」

そう言いながらキリヤは防壁の方へ走つていった

門の前にはリュリ達一人の姿があった  
アラカは所々に絆創膏をはつてゐる

「キリヤさんどうしたんですか？こんな朝早くー。」

「僕はあれですよ。素材探しに。父さんが先に昨日の夜行つてゐる  
ですよね。それより、おー一人は？」

「私たちは稽古に行くんです。」

「でも、なんで門が開いてないんですか？」

リュリが手を差し出す

「マモルは風邪をひいて寝込んでいるんだそうだ。頭の固いヤツがその代理。行きたいんだろ砂漠へ。」

「でも」の半は・・・？

キリヤとアラカの腕を掴むとリコリは思いつきり跳んだ

「チョシトーリコリー！」

「大丈夫。ゆっくり降りる。」

そつとキリヤがいるのにリコリは翼を広げた  
フワリと砂の上に降り立つ

「チヨット良いの？リコリからだよ自分の正体明かすなって言った  
のー。」

「いや・・・だがな・・・」

リコリに向かつて叫ぶアラカをキリヤが止める

「知つてたんですよ、僕は。リコリさんがドラゴンだって事。」

アラカは驚きの表情を見せて固まつた  
キリヤは話を続ける

「リコリさんがソーマさんのキズナだったときその刀、『竜牙』を作ったのは僕の鍛冶士の師匠だ。」

「えっと・・・キリヤさんって何歳でしたっけ？」

「僕は一十三歳ですよ。だから、十年前のリコッセさんも今も余っています。」

「チクリ笑うキリヤを見てアラカは少しひいた

「キリヤ、お前急いでいたんじゃないじゃないのか？」

「あつーーーやうでした！ ありがとうございました！ 失礼します！」

リコリの言葉で思い出した様に砂漠の中を重い荷物を持って走つて  
いった

\* \* \* \* \*

「やつぱりぶつ通しちつこじつこ。」

「だが、かなり良くなつてこゐる。四時間も耐えられる様になつた  
じゃないか。」

真剣を肩に担ぐと倒れるアラカに手を伸ばし起した

「やつだ、お父さんはどれくらいのペースだったの？」

その質問にリコリは少し考え始めた

「やつだな・・・歴代でいつたら一番早かつたな。」

「歴代のじづく事？」

「皆、私が樂できる様について刀を教えるつていつてくれたからな。

だいたいのヤツには教えたんだ。咲は全く争いなんか無かったのに  
な。」

十年前に始まつたこの戦い  
いつ向こうから攻めてくるのかも分からぬ「ピリピリ」した今とは全  
く違う時代つてどんな光景がここに広がっていたんだらう。

リコリはまだその時代が戻つて来ることを望んでいたんだが

「アーランヒー、他にもいるんだよね。」

「まだいる。キズナを持つている者もいれば、いない者もいる。」

「キズナがいな」「ドリコンは探してたりしてるの?」

リコリはなにも言わなかつた  
なぜか遠くの方を見ている

「話は後だ。キリヤ達になにかがあつたみたいだ。」

「早く行つてあげよう。」

リコリは顎を、本来の血でアーランヒに身体を変えた

「手に乗れ。急げ。」

## 第三章　?

砂漠の上空を猛スピードで飛んでいくと山のような所が見えた  
その近くに人影が二つと鳥の様な生き物が数羽飛び交っている

リコリは近くにアラカを降ろした

『後は任せて、二人を避難せろ。』

「分かつた！」

二人の周りにいる鳥の様な生き物をリコリが腕を一振りして追い払  
つてくれている隙にアラカは二人を避難させる

その生き物はどうみてもこの世の生物ではなかつた  
それが分かるとリコリは一匹残らず始末していく

面倒な魔法もあるようだな・・・

「無事か？」

人形になり三人の所へ駆け寄る

「ソラ爺が足を怪我したみたい。」

それを聞いてリコリは上着を脱ぎソラ爺の左足を止血した

「そこまでやらんでも大丈夫じゃ・・・」

「無理するな、小さい傷でも死ぬ」とはあるんだ。それよりココから離れた方が良い。」

リコリはそう言つながらソラ爺をおぶつた

「義手はどうしたんですか？キリヤさん。」

左腕の肘から下が無いことに気付きキリヤに質問した違和感があるのかずっと腕をさすっていた

「父さんだけでも助けよう思つて使つてたら壊れてとれたみたいですよ。また作りますよ。」

「それにしても、そんな残骸は無かつたぞ。」

「あれ・・・そんなはずはないんですけど。」

田元まで落ちてきたバンダナをグイッと持ち上げキリヤは不思議そうにした

「まずは街に戻つて一人の手当でしなきやね。」

「リコリはあれを持つていってはくれんか。」

ソラ爺が指差す方向を見ると

ソリがあり、その上には大量の金属が積まれていた

「いける？リコリ？」

「問題ない。」

アラカとキリヤはソラ爺を支えながら歩き  
リュリは人形のままソリを押した

\* \* \* \* \*

「ギャツギャツ」

「お疲れ様。これはなんだい？」

煙と消えた鳥が持つてきた金属の塊からは人間の匂いがした

「人間臭いけど、懐かしい香りもするな・・・。もし、あの人だつたら？ 王に知らせないと。」

不気味な笑顔を浮かべ悪魔は王のいる部屋へと向かつた

「ワタクシ、技術部で開発をしているモルガンと申します。」

「私に何のようだ？」

金属の塊を取り出すと自分の前に置き話を続けた

「ワタクシの魔法で発生させた鳥に金属を取らせにやつたといふ、  
使用済みの金属を奪つてまいりました。すると、そこからワタクシ  
の知人の匂いがしたのです。今、とある所にいらっしゃるという石  
のドラゴンの元キズナの匂いが。」

王は椅子から立ち上がった

「あやつのはズナが人間だと・・・アーチを此処へ呼べ。」

近くにいた者にさう告げると、すぐに走っていった

「モルガンだつたな、お前はアーチと共にトウキョウへ。」

「おおせのまま」。

?

翌日

キリヤのもの凄い願いで襲われた現場に戻った

安全の為にアラカのたつての希望でコロはキリヤにつっこいく事になつた

「うめんなさい。」

「なぜ謝る?」

砂漠の砂を一人でかき分けながらキリヤがリコリに謝つた

「こんな事を手伝わせてしまつて……。」

リコリは鼻で笑つた

「いいわ、私のせいだしなお前がそくなつたのも。」

「そんなこと言わないでくださいよ。リコリさんがこの腕を切つてくれなかつたら、僕の命は無かつた。」

\* \* \* \* \*

二年前

リコリが八年ぶりにトウキョウに帰ってきた血塗られた田人間と思い込んでいた悪魔から必死に逃げていたがキリヤは追いつめられた

「魔法をかける前に私の能力を教えて上げるよ、弱っちいキリヤくん。」

「来るな・・・・・」

「私の力はね。」

いきなりその悪魔に左手を握られてひどい痛みがキリヤを襲つた

「触ったものを少しづつ確実に私の忠実な屍鬼グールになるのよ。素敵でしょう?」

「離せーーー!」

見た目はそんなに変わらないが少しづつ自分の腕が違う何かになつていいくのを感じた

その時だつた頭上から黒くにじんだ白いマントに身を包み白い刀を携えたリコリが舞い降りた

「あんた誰よ?」

漫食されていくキリヤの腕を肘の少し上で切り落とし

キリヤの皿の前にいた悪魔を斬った

「・・・ココリ・・・さん?」

帰り血を浴びて真っ黒になつたりコリがいつかを見る

「キリヤ。止血しながら病院へ行け。」

その言葉を残しコリはまた消えていった

\* \* \* \* \*

「ちやんとザリザリのどけるを切つてくれたんですね。感謝します。」

「あつたぞ、義手。かなり深いどけるまで埋まつてたらしい。」

義手につく砂を払いキリヤに渡した

「あつがどうぞこます。作り直せなくつてすむ。」

「もしかしてそれは、あの人を作つたものか?」

義手についているマークのよつなものを見つけたりコリは皿を丸くして言った

「ええ、師匠が作つたものを父さんが改良して義手にしたんです。」

キリヤが義手についた砂をはらつてゐるのを見てリコリは微笑する

「義手も見つかることだ、帰る・・・？」

言いかけた言葉を詰まらし、リコリは遠くの方を見つめた

「何かあつましたか？」

「敬語、もうそれ止める。あそこドリゴンがいる・・・いるはずは無いの！」

「どうあえず行きませんか？」

「様子がおかしい・・・今すぐ行け。敬語止めろよ。」

二人は走つてその場所へ向かうと

綺麗な栗色の前髪を左頬のあたりに三つ編みにした少年が砂の上に倒れた

「この子は・・・？」

「衰弱しているな。」  
「ウーロ、土ノ鬼、石を司るドリゴンだ。

「

リコリは携帯を取りだしマーマルに連絡を取った

「ウーロが外で倒れている。・・・そんなこと知るか。誰にも気づかれずにトウキョウへ入れたい・・・？」

ズボンの先を引っ張られる感覚がし下を見る

「・・・おこー、コリー・・・・・オレは衰弱なんてーー、ふざゅう・・・・・

・・

「お前、癖が直つてない。」

やつ言いついで、コロコロ足でウーロの頭を踏みつけたと何もなかつたよ  
うにマーマルとの電話を続けた

?

「落ち着きなさいー。ウーロー、この人達は敵じゃないわ！」

ロートの医務室に入れられたウーローは人間達を前に暴れまくっていた

「こんなとこ居てられつかよー。オレは帰るー。」

「待ちなさいー！」

「はな・・・ギュッー！」

するとまたリューリがウーローの頭を踏みつけた

リューリの後ろにはアラカの姿がある

「大人しくしてろ。回復力も低下しているんだろう。」

「だからオレは・・・フ、ギュウー！」

「少し黙れ、手錠を外してやる。」

大きく息を吸い歌うように口を開ける  
しかし

そこから音は出ていなかった

すると、ウーローの腕につけられていた手錠が細かく震えだし一瞬で  
弾けた

「姉さんが作った手錠を……一瞬で？」

驚くようにリコリを見上げるとウーロは身体の力を抜いた

「同調さえすればだいたいのモノは壊れる。」

そう言って脚をウーロの頭から抜けた

「しっかりと治療を受ける、ウーロ。普通の人間程度の身体になつているのだろう？」

「そんなことねーし！ てか、お前にソトウキヨウなんかに居て良いのかよ。」

「大丈夫だ。定期的に帰っているよ。アイツのいる街にな。」

震えるリコリの力強く握った手からは血が滲んでいた

「リコリ？ 手から血が。」

アラカが言葉をかけるとリコリは我に返つたよつに拳を緩めた

「その女、お前のキズナか？」

ウーロは膝をはらいながら立ち上がる

「なぜ分かる。」

「ソーマにそつくりじゃねーか。誰にだつて分かるさ。」

「早くお前は自分のキズナを探し出せ。死にたくないなればな。」

背の低いウーロをマーマルがひょいと持ち上げベッドに乗せた

「この前のリコリ以上じゃない。目も見えてない見たいね。」

点滴をウーロの腕に刺しながらマーマルが言つ

「片目だけだし…痛いっつうの、下手くそ…。」

「五月蠅いわね。速くキズナと結びなさいよ、今の自我を失っちゃうんだから。」

マーマルがその言葉をばくと五月蠅かつたウーロは黙つた

するとリコリの服をアラカが引っ張る

「どうした?」

「自我を失うつてどういつて?」

「ああ、私達は世界と人類を繋ぐ為に作られた存在だ。キズナと結ばなければ本来、怪我をしても瞬時に回復したり病気などはしないが、あまりに結ぶ期間が長くなると人類を敵にまわしたと見なして世界が私達からそういう力を取り、新しい自我と入れ替え……」

リコリは口を閉じ上方を気にし始める

「どうしたの?」

「・・・」マイツは。すまない、話は後だ。昨日の鳥が来ている。」

「私も行くよ。」

力強くアラカが言つとリコリが笑つて出口に向かつた  
その後をアラカは小走りでついていった

入れ替わるようすにキリヤが部屋に入つてくる  
今日は休みなのか作業服ではなく私服だ  
珍しいのかマーマルは手を止めた

「おはようございます。」

「おはよう。どうしたの? 珍しい。」

「ウーロさんかなり衰弱されていたので、栄養でもと。」

「美味しそうな果物。! ? . . . 義手直つたのね!」

左手に手袋をしているのを見てマーマルが言つとキリヤが袖をまくる

銀色の義手が姿を現した

「前の義手が見つかったので。破損を直して、磨いただけですけど  
ね。」

笑いながらキリヤは言った

「けつ」いつ自然なヤツかと思つたが、サイボーグかよ。つてーなにすんだー。」

マーマルが黙つてウーロの頭を殴り睨み付ける  
ウーロも負けじとマーマルを睨むがキリヤが一人をなだめる

「良じですよ、言われなれてますから。気にしないで。」

「じゃあ、お詫び。この子をキリヤの家に泊まらしてくれない?」

「

マーマルの爆弾発言にウーロは固まつた

「別に構こませんけど。」

「良かつたー! じゃあヨロシクねー!」

「勝手に決めんじゃねーーー。」

リコリが感じとった昨日の鳥の気配はトウキョウの中ではなく砂漠  
のど真ん中だった

デハ"ンになつたリコリは腰にココを乗せてこく

「実戦だね・・・。」

『相手の出方を見れば良い。私の攻撃を避ける様にな。』

飛び続けていると黒い塊が空に浮いている

昨日の鳥だ

『耳をふさげアラカ』

そう言われたアラカは力強く自分の耳をふさいだ

リュリは口を大きく開け驚くほど爆音を黒い塊に向かい放った  
砂漠の上に降り立つとアラカは鳥達が落ちた方向を見たが黒い塊は  
白い砂漠の上には無かった

「これって悪魔の魔法なの？」

リュリはうなずいた

『命のないカスだが、それを作る魔法だ。前の蟲もそうだった。』

「それにしても、さつきの凄かった。雷が落ちる音は越えてたね。」

「あれ以上出すと、ヤツラにもバレるし、トウキョウに迷惑がかかる・・・」

ふと前髪で隠れる右目を触る

「まだ、アーツの力にまで達していない。」

「リコリ？」

リコリはアラカから《月光》を受け取り鞘から抜き取った

「一つ言つておく。相手が悪魔だらつと躊躇するんじゃないぞ。」

「分かった。」

《竜牙》を鞘から抜くとアラカはそつと構えた

?

ウーロはマーマルの強制的な誘いでキリヤの所で一泊した  
何だからんで入院中のソラ爺の所へ行き  
ウーロの事を紹介すると「ワシが退院するまで店は開けんでいい、  
トウキヨウを案内してやれ。」と言われたのでウーロを案内する事  
とになった

「おうー・キリヤ、爺さん元気かい?」

「お陰をまで。まだ動けないんですけどね。」

至るところキリヤは街の人と同じ内容で声をかけられ  
同じ内容で答えていった

ウーロは周りを警戒しながらキリヤの背後を歩く

二人は一息つくためにベンチに座った

「そんなに警戒しなくて良いんじゃないかな?」

ピコピコとした空氣をかもしだすウーロに飴を差し出し笑いつ

「なんだよー。」

「なにも食べていらないんだからこれしか持ち合わせないけれど、  
あげるよ。」

「…………。いらねーよ。」

そつ言いながら餈を受け取り口のなかに放り込んだ  
その様子を見てキリヤは微笑み空を見上げた

真つ青な空が広がり、雲一つない

「お前・・・リコリの正体知りてんのか？」

「キリヤで良いよ。知ってる、一年前には助けられたり、ずっと前に  
はもう会つてゐる。」

「ふーん」

その後一人はもう一度街に繰り出し  
キリヤはウーロにトウキョウを案内した

「欲しい物とかあつたら言つて良いんだよ。それなりにはお金持つ  
てるから。」

「べつつつ別に欲しいもんとかねーしーーー」

ウーロはそう言いつつも果物屋のリンゴを見つめる

「素直になればいいのに」と思ったがキリヤは口には出せなかつた  
何も言わないままキリヤは少しあとリンゴを買ってポケットに忍  
ばせた

「やはり貴方でしたか・・・懐かしい臭いは・・・」

通り際に男がキリヤに咳き  
キリヤは身体の動きを止めた

「覚えていませんか?」

「覚えてますよ・・・悪魔の貴方がなんですか?」

義手をきしませ攻撃の準備をし始める

「トウキョウを潰すためですよ。でも、戦うのは私ではありません  
よ?キリヤ。」

ポケットに忍ばせたリングゴがウーロの所に転がついて  
踏み潰された

「ウーロ・・・君?」

「死んでくれ・・・」

ウーロの周りにほのぼのの破片が浮き上がっていた

とつとんキリヤは裏路地へと走って行く

リコリほど足は速くないが、普通の人間よりかは早かった

「いのまま追いかけて半殺しにして、アーチ君」

「分かつ・・・てる・・・」

苦しそうにウーロが答えキリヤの後を追った

「あの人弟子は一人で十分んだよ。」

鳥をトウキョウまで寄せ付けないようリコリとアラカは必死になつていた

どれ程切り裂き、消したとしても  
何処からともなく大量の鳥が襲つてくる

「どうしたらいいの？きりがないよ。」

「五月蠅すぎてあの鳥どもを出す悪魔の場所が特定できない、手を  
緩めることも・・・無理だ！」

リユリはナイフも使いアラカへの負担を和らげながら《月光》を振  
つた

その後もひたすら鳥達を切り刻んでいくと何も言わずにリコリはド  
ラゴンの姿になりアラカに覆い被さつた

「どうしたの？」

『私じゃなかつたら失明していたぞ・・・マーマル。』

翼を押し退け外を見ると

鳥は消え去り、増えることも無かつた

「マー・マルとスズネが田の前に立っている

「アラカちゃんとは始めましてやんな？」

「えっと・・・」

動きやすく加工された着物を纏つスズネを見て固まつた

「ウチはロートの指揮官させてもうつとるスズネ。今後ともよろしく。

『何故こじが分かつた・・・?』

デリケンの姿のままリコリがマー・マルに問い合わせめる

「牙を剥き出さないでよね。トウキョウの周りには隠しカメラがあるの、それで分かつたってわけ。」

「お前が人に及ぼす力の事を忘れるな。・・・!?」

リコリは耳をすます仕草をした

「リコリ、どうしたの?」

指を口元へもつていいく

「静かにしてくれ」

そう言つたリコリの顔がすこし青ざめた

「先に戻る。」

「なにかあつたんでしょう、私も行くわ。」

マーマルが一步前に出てリコリと見あった

「スズネ、アラカを頼む。」

「任しどきい！」

マーマルとリコリは一瞬にして消え去り  
砂漠にはアラカとスズネしかいなくなつた

「もしかしてですけど・・・マーマルさんって・・・」

恐る恐るアラカはスズネに聞いた  
スズネは「コツ」と笑う

「氣づいたと思つた。そつやで、ウチのキズナ、火の民 光の  
デカラヒンや。」

「マジですか？」

「大マジや。」

?

全身に細かい切り傷を作り

キリヤは人気が一つも無い路地裏にいた

その前には目から涙を流すウーロの姿がある

「モルガンさん・・・貴方は何がしたいんです・・・彼は僕たちには関係無いでしょう・・・」

頭上を見上げキリヤは言った

眼鏡を中指で上げ、不気味な笑みをモルガンは浮かべる

「君を潰してから、この街をと思つてね。気にくわないんだよ・・・兄弟子である私が『特別』をもらえなかつた事が。その腕もね!」

モルガンがそう叫ぶと金団に答えるかのようにキリヤの左肩に鋭い石の破片が突き刺さる

そして、赤い血が吹き出すと同時にガシャンといつ音を出しながら左腕が完全にキリヤから放れた

「キ・・・リヤ・・・」

「・・・・・・・君は悪くないよ・・・ウーロ。」

右手で傷口をつぶ押さえて止血をしようとすると赤い血は自分の中から出していく

「クハハっ！傑作じゃないですか！死ぬ前に教えてください、『特

別》を・・・オリハルコンの精製方法を!」

モルガンはビルから飛び降りキリヤの田の前に立った

「嫌です・・・。師匠との約束・・・ですから!」

「困るんですね・・・」

切り落とされた義手を拾い上げ

まだついていたキリヤの腕を義手から完全に放した

「確かにあの人があつたモノは性能も、形もいい・・・それを私は  
ちは受け継いでいる。ただ、脆いんだ!」

モルガンは義手をキリヤの目の前で握りつぶした

破片は飛び散りキリヤとモルガンにあたり傷を作つた

「モルガンさん・・・!・!・!・!・!・!・!・!・!・!・!・!・!・!・!・!

飛びかかるうとしたとき

下から飛び出した石がキリヤの額にあてるターバンを切り裂いた

そのままキリヤは倒れる

「もつ、出血が多すぎてうまく動けないのでありませんか?早く・  
・・

その時モルガンは動きを止めた

「アーチさん、氣づかれた様なので退散しましょうか。この分だと助かりません。」

「わか……た……」

「生きていたら、またお伺いいたしますよ、キリヤ君」

田の前から黒い影が消えていき白い影だけが残つた

最後の力を振り絞り立ち上がりて白い影に近づいていった

「ウーロ……ごめんな……さい。巻き込んで……しまって……」

「何……ってんだよ！死ぬなよ！」

血で真っ赤に染まった右手を伸ばしてソックと泣きじゃくるウーロの頬を触れ、「う」と笑う

「やれば……素直に……」

キリヤはウーロの方へ倒れ、額がウーロの額に当たった

すると、ウーロが叫ぶと同時に周囲は黒い光りに包まれた

「なにが起つていいの……」

「キリヤ……ウーロー。」

リュリ達が駆けつけるとその光りは止み

傷だらけのキリヤを抱き抱えるウーロの姿があった

「・・・マーマル。コイツを頼む。」

「これって・・・」

キリヤに近づいたマーマルは額をみて驚いた

ターバンに隠れて氣づかなかつたが

キリヤの額にはウーロと同じ黒い刺青のようなモノがあった

「何処へ行く。」

「砂漠だつづーの。キリヤを傷つけたやつ、同じくらいうめ付けねーと気にくわねー！」

「場所は分かつてゐるのか？」

怒りを爆発させるウーロをひき止めた

「石が教えてくれるし。」

「ふつ・・・・。この距離、あの速さ。復活したお前でも追いつける  
わけがない。送つてやる。」

モルガンが精製した巨大な鳥の上に乗り砂漠の上空を一人は逃走し

ていた

「任務はどうするきでいる?」

「大丈夫。今のは下見みたいなものですから。」

アーチの質問にモルガンは軽く答えた

「それにしても、キリヤのあの思いはなんなんだ! 頭にきますね···。  
·。まあ、知る方法はまだある。ー

「それにしても、あの土ノ民はどうするつもりだ? 王に知れたら。」

「ある程度の距離まで行けばそこで一泊しましょ。また明日攻撃  
を」

『逃がさないつづーの!』

その声と共に砂の波がモルガン達を襲った

砂漠の真ん中に落ちると咳き込みむ

五、六メートル離れた所にウーロが立っていた

その眉間にシワがよっている

「ワザワザ戻つて来てくれたのか? ウーロさん?」

「そんな訳ねーだろ。オレのキズナに大きな傷を負わせたんだ。」

ウーロから放たれる殺氣は立つてするのがやつとなほど強力なもの  
だった

?

「久しぶりかもしれないな、ウーロの悪いクセがでていないのはー誰にも気づかない雲の上を飛ぶリュカリは様子を見ていた

ウーロの悪いクセ

思つてこることを言葉で逆にして言つてしまつこと

本人は全くと言つていいほど気づいていない

「もう一度操つてやるよ。」

先陣をきつたのはアーチだつた  
手をウーロの方へ向ける

「！？」

「どうした？」

モルガンは冷や汗をかくアーチに言った

「接続できない。」

ウーロの口元が笑うと砂がアーチとモルガンに絡み付いた

「キズナを持ったドラゴンにはそつぬ魔法はきかないって母さんに教わらなかつたか？」

「絆あ？なんだよそりゃあ！そんなんはなつ……」

キレたウーロの拳がアーチの顔面にクリーンヒットし  
アーチは気絶した

それを間近で見たにも関わらず、モルガンは冷静な顔をしている

「普通びびんだろ？」『うううの見たら。』

「別に。彼とは今日知り合ったばかりです。貴方と同じでねー。」

モルガンの影の中からあの黒い鳥が大量に発生し始めた  
思わず、一步下がってしまったウーロはその光景を眺めた

「私は戦えないので、この子達が相手です。」

「アハハっ！…面白こじやねーかーそつゆつのもあんのか。それじ  
やあ」

ウーロは地面に這いつぶばると足のない鎧兜を纏つたようなドリドラン  
ンとなつた

『「コシチのがやりやすいー。』

そう言つて大きく吠えると巨大化した腕で大きく砂を叩くと空中へ  
と身体を浮かせた  
そして、身体を丸め鋭い背鱗をつきだした

『一発で貴様を殺す！…』

回転しながらモルガンの頭上へ落下する

鳥たちがそれを止めようとするがウーロの身体に当たり砕けちつて  
いく  
落下するスピードは落ちる事は無かつた

「ダメだ…やめろ…」

ウーロの頭の中にその言葉が響き身体を人形に戻してモルガンの前に着地し  
モルガンの足に絡み付く砂は砂漠へと戻つていく

「私を殺すつもりじゃなかつたのですか？」

ウーロは歯をきしませ冷や汗をかくモルガンを睨んだ

「帰ればいいじゃねーか。礼なら、キリヤに言えよ。」

ウーロはそう言つて後ろをむき歩いて行つた

「キリヤに伝えてください。今回は無かつたことにして上にも報告しないが、次会つたときは容赦はしないって。」

「そんときは本氣でオレがアイツを守つてやる。」

その言葉を聞くとモルガンは鳥と共に消えていった

『なぜ泣いている?』

迎えにきたリコリが空から舞い降りウーロに質問をした

「知るかよつ！・・・でも、人間つてアイツらとは違つて・・・優しいな。」

『そうだな、キリヤに関しては人一倍だ。帰るぞ、キズナが待つている。』

トウキヨウに戻るとすぐにキリヤの所へ走つていった  
病室に入るときりやは眠っていた  
左腕があつた部分には何重にも包帯が巻かれている

「あの声はなんだつたんだ・・・?」

「土ノ民の力はスゴいな。」

扉にもたれかかるリュリはボソッと呟いた

「珍しいじゃん、お前が、空ノ民がオレらを讃めるなんて。」

「つらやましいだけだ。人の傷を癒すことができるその血が。」

「病人や死人には使えねーんだつーの。」

何も言わずにリュリは外へと出でていった

それを確認するとキリヤの眠るベットの足下に腰をおろし  
そつと片手でキリヤが触れた頬を撫でるとザラつとしたキリヤの乾いた血液があつた

「温かかったな……コイツの手ー

「ウーロ……？」

目を覚ましたキリヤの声が優しく耳に入つてくる  
「キリヤ……左腕、『めんな。オレ……オレがお前の左腕の  
変わりに』」

その言葉を聞いて一瞬、驚きの表情を見せたが  
少し微笑み身体をベットから起こした

「じゃあ、ウーロの右田に、僕で良ければ。」

「シコリと笑うキリヤの瞳は真っ直ぐウーロへ向けられていた  
つこつこウーロは顔を赤らめ目をそむけた

「バッカじやねーの……」

「いたつて本気だよ。そうだ、ボクの上着の左ポケットの中にある  
のあげるよ。」

クローゼットの中から毎に着ていた上着をとりだし左ポケットに手  
を突つ込むと真っ赤なリンゴが入っていた

匂いをかがなくても、鼻の中に甘い香りが伝わってきた

「実はあの時もうひとつ買ってたんだ。欲しかったんだろ?」

ずっと我慢していたのを解放せしむるにキヤヤに飛び付いて離れた  
なかつた

「…？・・・ウーロ？」

ウーロの身体は細かく震えている

その様子を見て微笑むと残った右腕でそつと頭をなでた

「明日からよろしくね。」

?

「フーグッ！御飯だよー！・・・って、あれ？」

アラカは部屋の扉を思いつきり開けて入ったが  
そこにはリコリだけでなくなにもなかつた

「ど、行つたんだろ？帰つてきてないのかな？」

しぶしぶアラカは部屋を後にした

ウーロに負け、倒れていたアーチはその夜に目を覚ました

「くそつー！ ゲホ！・・・なんでこんなことに。」

口の中に入った砂を吐き出し立ち上がる

周りはもう暗く、昼間よりも冷え切っていた  
そこに白いマントを被つた女が立つていた

「お前は誰だ？」

「お前がアーチだな？」

マントのフードを取ると銀色の短髪をなびかせていた

「お前は・・・やつか、応援の・・・」

「何と勘違いしている?私はお前を王の命にみり始末していただけだ。」

冷血なその女の目は揺らぐことなくアーチをにらみつけていた  
アーチの目には涙が溜まる

「オイ、嘘だろ・・・」

「嘘ではない。任務を失敗した悪魔など用無しと詰つ事だろ。」

その言葉を聞いてアーチは女の必死に足元にすがりついた

「モルガンはどうした?アイツも失敗したぜ。」

「知るが、私は任務を遂行するだけだ。」

「止めてくれ!...やめつ!...」

その瞬間アーチの身体は粉々に粉碎した  
返り血や肉片が女に降り注ぐ

「本当にすまない。」

女はトウキョウに背を向けると消えていった

アラカは一通りリコリが行きそつな所を探した

防壁の上、屋根の上、ソラ爺の店、広場・・・  
行くところが無くなり、最後にマーマルに連絡をとりそこで初めて  
キリヤが入院している事を知り  
マーマルと一緒に見舞いをすることにした

「ここにまは・・・。」

キリヤは帰る準備をしているのかカッターシャツを羽織っていた  
ベッドの上にはウーロが眠っている

「もしかして、ウーロがとつかやた?」

「そんな事ないです。起きてください。あげてください。」

「私、キリヤさんが髪結んでないの初めて見たかもしれないです。」

「ほんとうね。こんなに長かったんだ・・・それに奇麗

アラカとマーマルはキリヤの赤茶の髪をじっと見つめた  
自然とキリヤの顔が赤くなる

少しずつとウーロがのびをして起きてきた

「テメーら、うせーぞ。」

「あーーおはよ。」

キリヤはそれに気がつき声をかけた

「おはようて言つたが、この時間だったらこそこそか。」

「どうでもいい……。で、『イツラなんでこんな所いんだ?』

「見舞こときちやこけないつてこづの?・・・ぶふ

「なんだよーー。マー・マルー!..」

マー・マルはウーロの顔を見て吹き出しそうになつた

「だつてき、ヒヅイ顔してゐわよー。昨日、泣いた?」

団星のことを言わレウーロは反撃が出来なかつた  
すぐに袖口で皿の下をこすつた

「キリヤさん、今朝リコリ来ませんでしたか?」

急にアラカがキリヤにさう言つたがキリヤは少し考え込むと直ぐに  
返事を出した

「昨日の夜来ててくれたけど、すぐに出て行きましたよ。見当たらな  
いんですか?」

「もうなんです。何回か頭の中で呼びかけてるんですが、返事がな  
くて。」

「遠くに行つていのから返事ができないとかじやないですか?」

「バッカじやねーの?・・・つって!..」

キリヤが言つた一言にウーロが答えるとマー・マルのゲンコツがどん

できた

「アンタねえ少しは言葉の使い方考えなさいよ。私たちが『テレパシー』といつてこるその力はね、どこのに居たってキズナの声は届くの。でも、リコリが何も返事をしないいつてゆうことは彼女がどうしてもテレパシーをする事ができないって言ひたいとね。」

テレパシーに関しての発言にアラカはその場でしゃがみこんだ

「そんな・・・じゃあ、リコリは今ピント付いてる?..」

「そんなんじやねーぜ、たぶん。」

「ウーロ、君はなにか知ってるのかい?」

キリヤはウーロの言葉を聞き逃さなかつた  
その瞬間、少しウーロは顔を赤くする

「あんま詳しく述べしなねーけど。アイツは 掃除屋 的な事を王に  
やられている感じ。」

「掃除屋? まったく意味が分かんない。」

「お前はかなりの間あそこに行つて無いもんな。」

「うつせこわね。」

「でだ。じつに西っぽなしつこいのも怪しまれるし、人間のキズナが出来たとなつたら王が殺しきくる。」

ウーロが普通に言つた事にアラカとキリヤは固唾を飲んだ  
その事は気にせずウーロは話を続ける

「ほんないいやあ分かるだらう?」

「同族の私でも分かりづらいわ。でも、リュウの居場所は分かつた  
わ。」

「ソイツの質問には答えたかんな。」

ベッドの上に座り直し、あぐびを一つして  
四人の会話は少しの間途絶えた

まるで

嵐の前の静けさの様に・・・

?

病院を出てアラカとマーマルと別れてキリヤ達は店へと向かった

「やつ言えば。本当に氣づいてなかつたのか？キズナの証の事。」

珍しくウーロが話を切り出した事に少し驚きつつもキリヤは額のターバンをグイッと上へ上げた

「うーん、そうだな・・・。調度、八年前にこれが出てきたなんだけど、とくには氣にしてなかつた。仕事にも影響ないし、いつもコレしてゐるから。」

ニシコリとキリヤが暢気に笑うとウーロは顔を引きつらせた

読みづらご・・・完璧に、コイツの思考は読みづらい

「ウーロ」

田は合はなかつたがウーロはキリヤの言葉に耳をかたむけた

「昨日キミが言つた事、覚えてる？」

「覚えてる。やめりつてもそれだけは・・・」

「頼つて良いかな？」

キリヤとはやんなに出会つて時間はたつていなかつたものの

なぜか、驚きを感じた

「なんだよ。」

ほんの少し顔を赤くした

「義手作り直したいんだけど、片腕じゃ無理だから。手伝つてもうつて良いかな?」

「つんだよーそんぐらい、めんどくせーカズ……やつてやうあー。」  
渋々そう呟しながら腕の通つていらない袖口をギュッと握み  
キリヤの少し後ろを歩いた

\* \* \* \* \*

大広間の中心でリコリは一点を見つめ立つていた

その目線の先には豪華な椅子に座つてこる男  
悪魔の王だ

王の隣に立つ家来らしき男が口を開く

「それで、始末はしてきたのだな? 空ノ民、リコリよ。」

「つづけていなければ、これほど返り血は浴びていない。」

顔色一つ変えることなく

その言葉だけ残しリコリは部屋を後にしようとしました

「リコリよ。」

王の低い声が彼女の脚を止める

「私が憎いか?」

「王!失礼ながら・・・」

家来がそう言いかけるとリコリは振り返ることなく王へ力強く答えた

「私は、私達は十年前にアンタに負けた。それでアンタが強い事は重々承知している。そんな感情など抱いてなどいない。」

リコリは部屋を出ると大きくため息をついた

帰るか

「おっ!リコリじゃねーか。久しぶりだな。」

その声の主は

肌が黒く染まり、前髪をヘアピンで止めている男だった

「シユオウ、キズナの側に居なくて良いのか?」

「そうこうことは前に言われ・・・」

シユオウが言いかけるとリコリはそっと人差し指を口元に持つてい

つた

廊下の奥の方から靴の音が響き渡り  
アオガがこちらに向かって歩いてきた

「久しぶりに君たちが一緒に居るのを見たような気がするよ。」

「そりやそりですよ。リコリは任務でトウキョウの近くまで行っていたんですから。なあ？」

勝手にシユオウが話を進め  
少し大きめのため息をつきリコリは軽くうなずいた

「それなら、ミックを見なかつたか？トウキョウへ行つたはずなん  
だが。」

「私はなにも。近くの砂漠にいただけですから。」

そう言つて軽く咳き込むとアオガはリコリの頭を撫でた

「ありがとう。早くキズナが見つかればいいな・・・」

「諦めますから。」

リコリの言葉を聞いてアオガは憂いの表情を見せその場を去つてい  
つた

ある程度アオガの姿が消えると  
二人は歩き出した

「本当は嘘なんだろう？」

「何の事だ？」

「咳き込んだ」とつーーー。」

そう言いかけたリコリは思いつきり後頭部を拳でなぐった  
シコオウは思わずしゃがみ込む

「耳が良いのは私と母だが、人類よりも機能が長けている事を忘  
るな。」

「だからって殴る」とないだろ？？」

?

城から離れた誰も知らない小屋

シユオウはリュウをそこへ連れてきた

「私は早くトウキョウへ戻りたいのだが?」

「まあまあ、そう言つなつて。久しぶりに帰つて来たんだからよ。」

ホコリっぽい空気を入れ換えようとシユオウは窓を全開にする

リュウはその光景を黙つて腕をくみ、見ていた

「や二にいるのはナリヤタナか。」

「お久しぶりです。リュウさん。」

物陰から現れたのは

着物の様な白い服を着た青年だった

「どうしても直接伝えたい事があつたので彼に連れてきてもらつた  
次第です。」

「そんな事はいいから座つてくれよ、病み上がりなんだからさ」

シユオウはあわててナリヤタナを椅子に座らせた

「前と変わらないな、キズナに甘いのは。」

「うひーよ。」

「で？伝えたい事ってなんだ。」

さつきまでとは違つ冷静な顔をしたリコリにナリヤタナは語り始めた

「昨日話し合いが開かれて、王が決定付けた事なのですが。」

「それがなぜ私がトウキョウに帰つてはいけないことと関係がある？」

「どうか冷静に聞いてください、それが・・・ソーマさんの血筋を消すと言つたんです。」

「アラカをか？それなら早く・・・」

リコリがそう言つて小屋から出でこいつたとシユオウがそれを止めた

「お前の親からも止めると言われているんだよ。それに、アラカちやんだけ？その子を連れてくるヤツは元水だ。」

「アオガカ・・・ヤツとはミックの事がある。」

「なにがあつたか知らぬ一けど、俺らにまかせ。」

白慢げに胸を張るシユオウを不思議そつにリコリは見つめる  
ナリヤタナが白ら話したい理由がわかつたよつなきがした

「あの・・・ですね。」

困った様にナリヤタナが補足する

「人間が王の前に跪く前に夜の砂漠を乗り切る事は出来ないだろ？」  
と言つたので、彼もついていくんですよ。」

「保険というわけか。ナリヤタナ、お前は大丈夫なのか？一人で」

「彼がいなくとも能力を使えば周りは見えます。」

安心したような顔をし壁にもたれ掛かると  
小屋中に甲高い音が響きわたつた

「な！なんだ！」こじがバレたか？」

「すまん、私だ。」

リュリは携帯を取りだし電話に出た  
相手はマーマルだ

後ろではシュオウとナリヤタナが不思議そうにその様子を見ていた

「もしもーし、じつちだと出るのね。」

「当たり前だ、王の能力は知つているだろ？・なにかようか？

「なにかようか？は無いでしょ？・アラカちゃんが心配しているの  
よ。」

「さうか、実は当分帰れそうもない。その理由を今から一度だけ言つや。」

リコリはマーマルに全て説明し始める  
彼女は真剣に相づちをしながらも黙つて聞いてくれた

「それと、このことは私たちを知つている人間のみに伝える。」

「了解。アラカちゃんにはなんて？」

「私が合図するまで知らないふりをしようと。それだけ伝えてくれ。  
「わかったわ。そうだ、そこにシユオウ居るんでしょう、替わつてくれないかしら？」

それを聞くと黙つてシユオウに携帯電話を差し出した  
恐る恐るシユオウはそれを受け取る

「それを耳に当てる。そしたら会話が出来る。」

「お・・・おう・・・」

始めは怖々話をしていたものの  
相手が姉のマーマルだったせいか  
会話がはずんだ様子だった

「人間はあんなものを作る様になつたんですね。」

「そうだな。アレに慣れたのは最近だ。キズナ・・・アラカのおか  
げでな」

そつ言つているココリの雰囲気を感じナリヤタナは少し幸せな気持  
ちになつた

?

「そう……ですか、私頑張ります。」

電話で伝えられた事をアラカへ伝え  
マーマルは少し不安な気持ちだった

まだ、ドラゴンの存在とキズナについて聞かされて日がたっていない  
たつた十五歳の少女が今

今までに想像もしていなかつただろう事に向かつて歩いている  
しかもたつた一人の大人のわがままで

「マーマル? なんちゅう顔しどんねん。」

「えつ……」

スズネの一言で我に帰るとマーマルは自分の顔を何回も叩いた  
まるで自分に覚悟を決めさせるように

不安がるアラカの肩にそつとスズネが手をのせた

「……スズネさん?」

「大丈夫、マーマルの弟もつゝじるじ向いにはリコリだつてある。  
ウチらがしっかりサポートするで」

不安など感じさせない笑顔のスズネを見ていると

「気持ち、落ち着いたのかアラカも笑顔を作った

「問題はウーロとキリヤやな。見つからんよ」  
「おひさまよ」とさわると。

「あの一人にはまだ伝えてないからね。」

スズネとマー・マルが悩んでいると  
アラカが思い出したように言つた

「そういえば、キリヤさんが久しぶりに大きな仕事が出来たから仕事場に籠るつていつてました。」

「ほおう、熱心やな。でもまだソラ爺さんは入院中じや・・・」

「ちやんと許しをとりて、ウーロさんと頑張つてるみたいですよ。」  
満足感を得たようにスズネは笑つたが  
となりでマー・マルはなんとも言えない表情をしていた

「ビ、ビ! したん? そんな顔して。」

「ウーロが人の助けをするなんて・・・あり得ない・・・」

「珍しい」とみたいやけど、まあ、今は明日の事だけ考えよつ。」

?

ナリヤタナ達と別れると  
リゴリは形だけではあるが自分の部屋へと向かつた

廊下ですれ違うのはもちろん悪魔ばかり  
王に仕える使用人達が自分の顔を見るたびに頭をさげてくるからか  
ものすぐ落ち着かない

きっとそのこと以外に落ち着けないなんらかの理由はあるのだろう

当分帰つてきていなさいか  
リゴリの部屋はほこり臭かつた

窓を開け、夜風を部屋に入れバルコニーの縁に座つて空を見る

星はトウキョウよりは輝いているし  
空気も澄み切つて、雑音もないが

リゴリはやつぱつトウキョウのが何倍も良ことと思つた

「やはり・・・腐つているな、この国は・・・。」

やつづくと背後から聞き慣れた声がした

「当たり前だ、王が腐つているからな。」

「ラル兄さん・・・いつ入つて・・・」

扉の近くに立っているのは

彼女と同じ白髪の大人びた顔の青年

ラルだ

「バカ。お前の能力をすり抜けられるのは俺と母さんぐらいだろう？」

「確かにそうだが、なぜここに？..」

「特に意味なんてないさ。ただ、久しぶりに妹を見たかつただけなのさ。」

「きもちわるい」

笑つて話す兄にリコリは一括を入れる

「まあまあ、いいじゃないか。それよりも明日・・・いや今日が、俺が言えるはとにかく自分のキズナを守れ。」

「ああ、わかつてる。死ぬ氣で守る。」

「『死ぬ氣』になるだけだぞ。本当に死ぬな、キズナは思っているより強くはないんだから。」

そして、トウキョウ

夜、当田となるとスズネ達は寝る」とはできなかつた

もちろんアラカも

「シユオウがしつかり伝えていれば、アラカちゃんはアツチに連れてかかるだけ。」

「だけど、リコリの声は何かを隠してゐる感じだつた。」

マーマルが言つた言葉にアラカは付け足すように言つた

「大丈夫や。彼女のことやしキット考えでもあんのやひ。」

笑つてスズネは言つたが直ぐに真剣な顔になるとアラカをみつめた

「どうしたんですか?」

「この事くらいは言つといてもええやろ。奴の魔法についてはほどんど分かつとらんのよ、知つとんのはほんの一握り。これだけは言つとく、田は見るな。ええな?」

「はい。」

「ほな、今は寝とき。疲れとつたら元も子もないし、お母さんにも説明しちゃや。」

またスズネが微笑み、少し安心したのか  
ほんのりアラカに眠気がきた

「スズネさん達も寝てくださいね。」

「チャント寝るよ、今日は街とアンタを守りとな。」

ほんの少し挨拶をかわし  
アラカは家に帰つていった

「本当に寝るの?無理なんじゃなー?..」

マーマルが資料をまとめながらスズネに言った

「ウチが行けたらえんやけどな。」

「スズネ? ? ?」

「ウチが行けたら、力で助けられんのにな。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6289m/>

---

SAVE

2011年10月7日07時41分発行